明記せずと雖もヂョンス Jones 氏を初め數多學士の說に依ば阿利耶人は中亞細亞より出たる者にて同じ血統の分離せし證據あり而て梵 Sanscrit 語が大に隔絶せる各國の語に似る所を以て見れば曾約全書に在る如く人間の元始は中亞細亞に住み後に至て各國へ分離したる者なりと斷言せり

英國の博士マックスムレル Max Muller 氏は深く梵字の書籍を研究せし人なるが氏の說く所を聞に阿利耶と云ふ語は尊貴と云ふ意味にて國民の名なり古き梵字の書摩拳律法の中に確乎たる證據あり而て印度を阿利耶和多 Arya Varta と云ふ是は阿利耶國民の住所と云ふ意味なり今の阿利耶人と稱する者と詳く調べ見に三の階級あり則ち婆羅門、紐恒利耶 Kshatriya 毘舍多 Vaissya の三にて婆羅門は敎師刹恒利耶は武人毘舍多は農夫な



り倘は能く糺し見れば阿利耶はライチンのアヲレ Arare と同じ語にて地主と云ふ意味あり阿利耶人は自ら此名を求めトラニヤン Turanin 人と區別を爲すトラニヤンは移住人と云ふ意味なり云々

印度に於て此阿利耶と云ふ國民の名を早く廢棄したり然と雖波剌斯の歷史に阿利耶と云ふ名が原の國民の名として顯はれゼンアベスタ Zend Avesta 書に此國民の住所を阿利耶地と名げ舊エザフトの地理學士プトレメヲ Ptolemeo 氏の著書に阿利耶人は北西天竺ヲクスソ Oxus 河の邊に住と在り且つ前に述し如く舊ギリシヤの地理學士ホメール Homere 氏は波剌斯の南に阿利耶國ありと云ひヘロドット Herodote 氏はメド國の中に阿利耶國ありと云ふ故に歐州諸國の學校に於て舊亞細亞の

歷史を調る生徒は止を得ず阿利耶の名を知り進で波剌斯の古跡に在る古字を調る時はダルユス Darius 王を初め數多の國王が阿利耶國民の王と明記せられ舊ギリシヤ Grecia のトラシヤ Thracia 領を原阿利耶領と云ー證據も在り舊ゼルマンの古跡にも阿利耶 Ariyas の名あり英國は今尚アイルランド Ireland 則ちアイラ國の名を存す其他百端の證據ありて遂に天竺の阿利耶人は歐州諸國の人と同し血統なる事を知るに至る

天竺に於て阿利耶人は初めヒマラヤ Himalaya 山と尾底牙 Vindhya 山の間に住み漸次繁殖して四方に蔓延せり世にインドヨウロッパ Indoeuropa 人インドセルマン Indogerman 人と稱する者は皆な阿利耶人にて之を東西の兩部に分つ東部はトラニヤン人を除の外波剌斯アルメニヤ Armenia 信度多 Hindoustan の國民にして西



部はトルコ Turco 人を除き他の歐州諸國の人民なり是は明白なる証據も在り亦た語の中にも自ら顯はる

如何に歷史家が疑ひ哲學者が惱り文學者が談と雖も同一なる語と古跡の証據に由り止を得ず服する所なり英國と天竺に今尚同一の語が多く在り例て云ば神、家、親、父、母、子、人、犬、牛、心、涙、勇氣の如き是なり此等は啻に英國と天竺のみならず歐州各國皆同一にて同一血統の証據なり古代セルマン人ギリシヤ人イタリヤ人フランス人波剌斯人信度人の先祖は同國に住み後に至て分離したる者なるが思に信度人は最後に先祖の地を去し者ならん彼等が格別に古語を多く存するも參考の一なり阿利耶人の分て西に行し者は眞正の宗教を奉し道德を堅固に守り日に月に開化してカム Cham 人種を諭ートラ

ニヤン Turanian 人を導き遂に完全なる社會を組織して或は殖産に心を用る者あり或は商法に身を委る者あり進で万國交際の基を開き世界第一の働人と成しが東に行し者は雪山山の狹き谷を傳ひ恒河 Ganges 河の岸に添て南へ下り漸く天竺の平地に出て居を占め遠近の土人と戰ひ強て彼等を服從せしめ雪山の絶壁あるが爲に幸ひ他國の強敵を受ず心の儘に土人を壓制し遂に己の驕慢より眞正の宗教に離れ道德を失ひ品行を亂すに至れり古き歷史を見に

セミラミス Semiramis

ブコドゾール Nabuchonosor

シルス Cyrus の如き英勇豪傑は亞細亞亞弗利加歐羅己の各國へ鉾を向ざる所なき程なれど天竺を攻たる事なし隨て天竺は各國との交際も厚からず開化進歩の便を得ずして舊習に耽み因循姑息の嘲笑と野蠻蒙昧の譏を免が



れざるなり

英國學士ウイルホル Wilford 氏の說に印度人の先祖の居所はパンチヤブ Penjab 領にて此地は古代仙人の說が盛に行はれ讃誦伏陀 RigVeda 書は此地に於て編制せられし者なるが之を編制したる一人毘耶娑 Viassya と云ふ人は此地に產し仙人云々と在り偖讃誦伏陀書を編制したる年代を調べ見に是は基督降生以前一千八百年より五百年の間にして其頃阿利耶人は天竺の大西境信度河より大東境恒河河まで廣り未だ三等の階級なかりしかば一致協力して他の各番土人を慘酷に扱ひ彼等に奴隷鬼蛇等の負しめ交際を爲ざりしが日を經て互ひに結婚し雜種人類を生ずるに至れり大戰 Mahabharata 書に高名なる黑 Krishna は神と成し或る土人の王の娘より產れし子にて婆羅門

教師アスナカ Asuka の妻は那伽 Naga 蕃の王の女なる証據あり

摩拏 Manu 律法は基督降生前五百年より降生後七百年の間に組立られし者なるが此頃阿利耶人は東ベンガル Bengala 海岸より西印度洋濱まで廣る是は摩拏律法二巻十七章に判然と書載たり

蘆摩耶那 Ramayana 書は蘆摩王が天竺の南錫蘭 Ceylon 島に戰爭せし歷歷にて是は特に新しき者なり此頃達槻拏 Deccan 領に婆羅門教が勢力を得て佛教を錫蘭島へ押籠摩臘婆 Malabar 海岸に猛威を震へり抑も婆羅門教の摩臘婆海岸へ入一事はベンガル府の古跡に由て基督降生後千年の頃と知り尋でタムル Tamul 領に入し事は紀念碑の証據に由て基督降生後四世紀の初と知る其第七世紀に至り一時盛大なりし天竺の佛教は全く消



滅せり

天竺の阿利耶人は遂次に繁殖して婆羅門教師が南北両部に別れ縁組の規則に由て九者と成り今は四十五派の血統あり

阿利耶人の中刹帝利 Shatriya 即ち武人は他の各番士人と縁組する事を嫌はず是は聖書に黒 Krishna 神の履歷ある故なり然ど摩拏 Manu 律法十巻に刹帝利が士人と縁組して輸達羅 Sudra 即ち職人に陥落せし始末を詳く載たり

阿利耶人の中婆羅門即ち教師は武人が士人と結婚して耶人に墮落せし前車の轉覆を見て自ら後事の誡警と爲一永遠陶利耶人の正統を繼續して社會の上流に生息せんと欲し嚴重なる規則を設け專ら結婚の事に注意したり

幾千ならずして釋迦佛教の新門を開き高尼同等の說を述べ

頻に婆羅門教を攻撃したれば武人は忽ち之に加擔し農夫職人も服從して旭の昇る如き勢力と成り婆羅門教徒を逐て曷羅闍補羅 Radjupta 領阿浮 Abu 山の奥へ押籠たり婆羅門教師は止を得ず阿浮山の奥に於て曷羅闍補羅蕃人を説き之を己の蕃に加へ神の悪に由て組立られし武人なりと稱し專ら佛教を撰滅する計畫を爲せり是は基督降生前二百年の頃にて曷羅闍補羅蕃人の世に出し初なるが其後數度の戰爭に非常の勉を爲し遂に佛教を打破り大に名譽を得たり

曷羅闍補羅蕃人は漸次に勢力を得て國王と成し者も多く今尚血統を天竺の上流社會に有しら る 元來此蕃の人は勇氣ある耳ならず名譽の爲に生命を顧ざる者なれば職場に臨で最も強し近代の歷史を見にマホメット Mahomet 教徒が天竺へ侵入しレバベル Bibar と云ふ猛將に八万の精兵を師て攻立たれど僅か一万に足ぬ曷羅闍補羅 Radjupta 蕃人の爲に追返されたる事あり

曷羅闍補羅蕃人は勇氣に過て慘酷なる所業を爲す者なり特に女を殺は虫を殺に異ならず彼サッチ Sati 蕃人が生たる女を死たる夫と共に焼殺より一層野蠻の習慣ありて貴族の死たる時は妻も妾も嬪女も其に焼殺を常とす故に自然と女の數を減じ今より六十年前の統計を見に或る小蕃は男千人に女十人の割合なり

## 第四章　各蕃土人の宗教習慣の事

天竺は婆羅門教の出ざる前より各蕃土人の宗教と稱する者あり則ち惡魔死人禽獣木石の類を畔み助を求る事にて是よ

り百端の悪弊を生じ遂に之が習慣と成り今に偽の神を祭る爲め人を殺す者あり人の肉を喰む者あり隨て常の風俗も野蠻の極点に留り一女數夫に見もる者あり一男數妻を弄する者あり請ふ左に說く所を見て彼等が天理に外れ人道に戻る容を知れ

第一　惡魔の祭禮

惡魔に千種の供物を爲し祈を捧少助を求る事は各蕃土人の習慣と成り山の奥に住む者は格別の儀式を以て之を爲す是は古代の風俗を維持せる者にて自ら誇る所なり

婆羅門敎の說に惡魔は神の敵なり惡魔の祭禮は人を殺す基なりと在を以て婆羅門敎に從ふ者は始め惡魔を憎み惡魔の祭禮を賤しれど終に彼等の歡を買ふ爲



め之を己が敎の中に加へ其に惡魔を拜み其に惡魔の祭禮を爲に至れり土人の常に說く所を聞に惡魔は初め人間なりしが世に在る間は暴惡無道の業を爲し世を去るに及で靈魂惡魔と變じ人間を害する外に望なき者と成れり故に害を避る爲め物を供へ祭を爲し彼を是めざるべからず云々

中世ベンガル Bengale 府に於て英國の官吏が非常の壓制を絕し大に人民を虐たる事あり該吏の死後に至り燒酎と煙草を携へ墓所に參詣する人の絕間なりし燒酎と煙草を供て靈魂を慰め害を避んと欲する者なり

摩臘婆 Malabar 海岸に住む土人は格別に惡魔を拜み每戶に惡魔の石像を造り其前に於て牛野羊鳥の類を殺し流れ出る鮮を飯に注ぎ之を供て拜むを常とす

中天竺の平地に住む土人は牛野羊鶏の類を犧牲と爲ー惡魔の像に血を注ぎ惡魔が我に惡たり我は惡魔なり抔と叫び狂人に等き擧動を爲す事あり大勢群集せる祭禮の時は特に烈し

第二　人殺の祭禮

天竺の古牒を調べ見に昔時人殺の祭禮が盛に行はれ婆羅門敎に從ふ者は大に之を厭ひ頻に駁擊ーたれど數多の土人に歷劫せられ止を得ず漸次已が敎の中に加たる証據あり

哥利加富蘭那 Kalika Purana 書に摩醯濕伐羅神が其妻哥利 Kali 神の讒を述て道く鹿を殺し祭を爲す時は彼に五百年の喜を與へ人を殺し祭を爲す時は彼に千年の喜を與ふ蓋し一人の肉は彼が千年の食なり云々と在るを以て今に人殺の祭禮を行ふ者



あり

昔はサッチ Sati と云ひ今はスッチデモと云ふ一の慘酷なる習慣あり則ち人殺の祭禮にて國王大臣其他貴顯紳士の世を去し時は妻妾侍婢を悉く焼殺ー大祭典を執行する事なり是は摩醯濕伐羅 Siva 神の妻サッチ神が自ら身を火中に投たるより初る故に之をサッチと名く

自ら名をダグ Thugs と叫ぶ一の講ありダグは焼殺人と云ふ意味にて此講の中に在る男女數人は人を殺を以て功と爲し常に哥利 Kali 神を拜み已の功を立んと欲ーて頻に祈る者あり

英國政府は夙に人殺の祭禮を禁止する爲め嚴重なる規則を設け陰に陽に盡力するを以て雖も未だ全く消滅するに至ず或は山の奥に匿れ或は林の中に潜み窃に之を爲す者あり

佛國の學士ルスレ Rousselet 氏の著書にサッチは信仰の業と云ふ意味にてシバ神の妻サッチ神が初て行ひ遂に天竺の習慣と成り曷羅閣補羅 Radjputa 領に最も盛なり此地の豪族は死て妻妾侍婢を燒殺せざれば家の耻と思ひ面目を失ふ者と爲す昔時有名なる大將の一人が死て妻妾侍婢二十五人を一時に燒殺し譽を後の世に遺す爲め此事を碑文に認め今尚墓所に存在すとあり

又たエノ Enault 氏の天竺史を見ば天竺に斯る習慣の在る事は信仰の故に非ず全く妻が夫を殺する惡弊を防ぐ爲に設たる法ならん果て然ば聊か理ある事にて妻は夫と共に死る筈の者と思ひ定め夫の命は我が命と悟り力の在ん限り夫を大切に爲る最好結果を見の目的ならんと在り然ど人の心に法



の嚴なるを以て經べからざる者なれば却て之が爲に最惡結果を見に至れり

天竺は親と親が相談して幼き男女の緣組を爲す事あり故に未だ乳臭を去ざる小女の疾く既に夫を失ひ寡婦の資格を有する者も多し是等は幸ひサッチを免れ命を保つ習慣なれども摩拏 Manu 律法に寡婦は生涯修行の爲め日に粗食を喰ひ身に麁服を纏ひ謹で男の名を云べからず世の樂を爲べからず之を犯す者は罪なりと在を以て再緣する事あたはず獨り春の日の暮がたきを悲み秋の夜の明やらぬを歎き遂に情の遣方なくして知ながら品行を亂し自から身を傷け他を害ふ者あり

心の弱き女は嚴重なるサッチ Satti の習慣法則あるにも拘はら

す逃て之を避んと欲する者あり斯る時は親族知音の甲乙が追蒐て捕へ來り強て燒殺すれど尙は悲に耐ず大聲に泣叫で從はざる者あり此時は止を得ず天井より逆容に釣下て髮を削り操を破し女なる事を大勢の人に示し大勢の人は罵詈讒誘して止ざるなり

剛氣の婦人は虛き名譽の爲に我を忘れ自ら進でサッチの習慣法則に從ひ身を猛火の中に投ずる者あり既に英國政府が領地に之を禁じたる後ボンベ Bombay 府の知事へ若き女が書を呈し此度かたり特別にサッチの許あらん事を請しかど許されざりしかば英領ならざる地へ行て望を遂たる事あり

英國の學士ドワレン Dewaren 氏の行旅日記に今を距る四十年前ベンガル Bengal 府のファラバ Farrag 領に於て氏が親く見サッチ



の實況を載たり則ち嬋娟窈窕たる若き婦人が身に錦繡の美服を纏ひ頭に金銀の飾冠を戴き中央に立て周圍に群集せる男女に向ひ妾は方に世を去て契り深き夫と共に樂の地へ行んと欲する者なり請ふ妾が幸を賀し賜へ最早今生の面會も今を限なれば妾が身に觸し物を遺品として甲乙に分たんと述べ終る折から幽に響く笛の音を聞て若き婦人は笑を含み耶は則ち妾を呼ぶ笛なり然ばと云つゝ靜に美服を脫た香油に滋る白衣を着て種々の品物を群集せる男女に分け與へ軈て夫の死骸を置る臺の上に登り自分の白衣を以て夫の死骸を覆ひ死骸の頭を自分の胸に當ながら細く長き聲に唱を爲ば大勢の人が之に答へ油を注し薪を一尺ばかり積上たる所へ婆羅門教の祭司が火を附し松明を携へ來り之を若き婦人

に渡ば婦人は受て自ら我が髪の間に髭の毛は烈しき音して早や燃失たれと婦人は更に驚く色なく倘は經文を唱ながら自分の身に纏る白衣に火を附け續て薪に三箇所ばかり火を附たれば忽ち煙の立昇を合圖に大勢の人が四方八方より薪に火を附け炎々と燃上れる焔の傍に於て狂人の如く踊を爲し翌日祭司が死者夫婦の骨を拾ひ集め壺に入て親族の許へ贈れり我等は斯る道ならぬ事を見に恐ず我が罪の如く恐れ大に悔て宿所へ引取しとあり

又ヂヤコモ Jacquemont 氏の旅行日記を見に今を距る三十五年前ベンガル Bungalo 府エタワ Ettawah 城の邊に兄弟二人の婆羅門師が住て兄をフルクシン Hurrulsing と呼び弟をブルゼシン Baljet Sing と稱し各自一人の妻を持り其家元來豐饒ならねば弟は妻のコンキリ Kunchili と云る者を兄に預け置て稼の爲め遠國へ趣き



待ども〳〵返り來ずコンキリは夫の身を案じ煩ひ常に兎や角と語り出て涙を催す事の在をフルクシンは厭く思ひ乍ら三年の星霜を經て圖と考へ見にコンキリを預し爲め費る所の金も少からねば心よからず思ふ折抓シボイ Cypayes 聯隊の兵卒がブルゼシンの衣服を携へ來りブルゼシンが衣服を河岸に殘し置て身を河中に投じ自ら死し事を告ぐフルクシンは之を聞て心の中に喜び衣服を受て兵卒を返し歎き悲むコンキリを奥の一室へ招き汝は既に孀婦と成て世に賴なき身なり依て今此衣服を夫の屍と思ひ迯にサッチの Sutti の儀式を執行し婆羅門師の面目を立よ汝の夫は既に世を去てボインコンド Boykonto に在り汝も疾く行けサトクイ〳〵 Sadkili と勧む梵語の

ポインコンドの極樂てふ意味にてサドクイは貞友てふ意味なりコンキリはフルクシンの勸を聞と雖も夫の屍を見る迄は世を去に忍ず僅か兵卒一人の語を信じ世を去ー後に至り若や夫が存へ居て歸り來ん日の在も爲ば中々に遺憾し一旦兵卒の語に聞し河の在る地へ尋ね行き虛實を確と糺せし上にて兎も角も爲ん者と心を定め此事をフルクシンに相談す然どフルクシン Hurruk Sing は之を聞ず直に親族へ報知し數多の婆羅門師を集めサッチの用意を爲り此時コンキリ英圖の官史に遇て事情を語り賴ば命の助る可き術は定に在る者をコンキリは之を知ず親族の壓制に止を得ず阿片を飲み半死半生の身と成て火葬場に至り親族知音の甲乙に遺物を分與ー了ば四人の婆羅門師が強てコンキリを火葬臺の上に乘せ村



中の老若男女は細く長き聲を揃て讃美の唱を爲し軈て薪に火を點じ忽ち燬と燃へ上る炎の中にコンキリ Konchilie は今を限の聲を出し喝よ甲乙よ待かねー嬉や我を助る爲め夫が向の河を渡と叫び乍ら頭を揚げ此火葬場の横を流る閻牟那 Jamna の河を皓と見る是は不思義と驚き乍ら甲乙も亦た頭を回ー閻牟那の河を瞥く見ば憶も依ぬブルゼシン Baljet Sing の一艘の小舟に棹し喝よ甲乙よ暫く待と叫び乍ら此方の岸へ寄よと見しが風の如く走り來て炎の中へ踊り込みコンキリを小脇に抱へ甲乙の前に出て慇勤に擯拶し我れ國を出て兵卒と成り摩伽剌陀 Maharattes の戰爭に敵を避る爲め身を河中に投じ其後敵國の虜と成て長の辛苦を嘗め漸く歐州の大將に從ひ功を立て今は士官と成り聊の閑を偷み古鄕に返り來ば豈に圖

や妻は疾や我を世に莫き者と思ひ定めサッチの儀式に從ひ身を犧牲と爲す義を聞き空を飛で駈け來り幸ひ妻の命を救ふ是は實に限なき喜なり甲乙も亦た我が爲に祝し給へコンキリよ汝は希有の勇婦なり貞女なり嗟芽出度と云ひ乍ら甲乙に禮を述べ皆な打連て返りしは世に有べうもなき事どもなりとあり

天竺の學士サンデルボーズ Shunder Boso 氏の天竺習慣書と云ふ書に余が未だ幼少の時に圖と母の顏を見ば頻に悲む色の在を以て不審に思ひ其故を問ば母が益す悲み子よ汝は未だ知ざるか汝の常に慕ー伯母が今度良人を失ひ世に賴み莫き身と成て自らサッチの儀式に與り身を犧牲に捧る事を望む故に我は別を惜み斯の如く悲む也と答ふ余は未たサッチを見



たる事なし因て之を見と欲し直に伯母の家に行て見ば夥多の親族が集り伯母は赤き襟の打掛を着て奥の室に在り尤も常と變り顏に白粉を塗り頭に金銀の飾を爲し燈火の傍に腰を掛て周圍に老婦を集め愼で經文を唱へ居り余の顏を見も常の如く詞を發する事なし此に於か余はサッチの愼む可き事を知り伯父死骸を收し棺の側に座し熟らり乙の摸樣を見に何も伯母の勇氣と貞操に感ずる色あり伯母は頻に余の顏を眺め乍ら詞を云ず暫く在て一個の婦人が伯母の傍に進み白き布を以て伯母の唇を拭り是は伯母が曾てベテル Betel と云ふ赤き粉藥を口中に含み居て赤を唾を流せる故なり而て白き布は之を拭し婦人が伯母の遺物と爲て大切に納め又た別に一個の婦人が別の白き布を以て伯母の顏に塗し白粉を

拭ひ同く伯母の遺物と爲て大切に納め他の婦人が伯母の足下に伏し犧牲の功力に山て信仰の勇氣を祈と唱へ終ば伯母か靜に手を延て指を燈火に焼き半あまり焼たるに顔の色は少も變ず常の如し夥多の婦人が之を見て大に感じ斯る信仰の勇氣を以てサッチの儀式に與り身を犧牲に捧る時は必ず

ボインコンドに至る可と云ふボインコンド Byncondo は極て ふ意味なり斯て其日の十時に葬式の行列が家を出て恒河 Ganges の河岸に在るニントラ Nimtollah のグウド Ghuth と云ふ墓地に進みカルクタ Calcutta と云ふ府に於て衆人を饗應し伯父の死骸を親族がサボイ Charpoy と云ふ死人の臥に移し伯母は通常の臥に乘て更に進みニントラのクウドにて十五分の時恒河河の水を死骸に注ぎ夥多の婆羅門師が死骸を火葬臺の上に据



へ之に大禮服を着せ異口同音に墓陀羅を唱へ數多の甲乙は死骸の周圍に薪を積み充分に用意を爲す軈て婆羅門師が墓陀羅を唱へ終ば伯父が靜に火葬臺の傍へ近き死骸の上に錢米花等を散し夜摩 Yama と名る死去の松明を持ち笑を含で火葬臺の上に昇り死骸の側に伏て死骸を抱きウレ〳〵 Hurrih と叫ぶ是は火を附よと云なり此時親族が四方の角に火を點じ香油を入し數個の壺を投ぬ薪を動し火を熾に爲す然ば黒烟立上て伯母の姿を陰ー遂に火が燃て伯父の死骸と伯母を焼き數多の甲乙は聲を揃て頻に伯母の勇氣と貞操を讃美し盡く焼て跡に殘る灰を恒河 Ganges の河へ流ー骨を集て家に返りサッチの儀式は全く終る嗚呼慘酷なる儀式かな此事を思ひ起ば今尚總身の震を覺と在り

天竺の習慣を細に述る時は寔に酷たらーき事のみ多く加何に基督の光を厭ふ国なればとて斯までには有まじと初て聞く人は信じがたき程なり今其二三を掲て読者の胎を寒からしめん

ギンヂ Ginji 府の乾の方に哥利 Kali 神を祭れる寺あり名を屠利 Hari 寺と云ふ毎年一度の祭日に数多の男女が裸體參詣を爲し雑踏の中に故と一個の少年を踏み殺ー息の絶ぬ間に肉を喰ふ爲め爪を以て掻取あり歯を以て噛取あり遂に骨のみ殘ー去を例と爲す

ウヒジカバタム Visigapatam 府の山に住むゴンド Gonds 番人は人間を供物に爲て僞神を祭る事あり之をメリヤ Meriah と云ふ今を距る七年以前人狩打連て不意に山を下り麓の村に住る人を悉く奪ひ去て翌日祭禮を行ひ數多の男女を生ながら供物と爲し遂に殺て血を飯に注ぎ再び之を供物と爲し已が隆意祈禱せり



昔時より此地に悪疫の流行する時は必ず犧牲祭禮を執行す是は特に慘酷なる祭禮にて犧牲の爲に殺す人を買ひ求め之に新調の衣服を着せ祭禮の場所へ伴ひ行ば儀式を司る人あり彼が胸の間を裂き割り流れ出る血を土に注ぎ其後大勢の人が飛び蒐り肉を掴み喰て去る若ー干刻の時は人を焼き殺し數多の男女が異口同音に泣て雨を祈る

エノ Enault 氏の旅行日記に此地は各村に氏神と云ふ者を祭り祝の日は必ず人を殺し犠牲祭禮を執行す尤も此地の祭禮は作物の豊饒を祈る爲め執行する者にて多く種蒔の時節に在

り祭禮の摸樣は七日前に犧牲と爲す可き人を捕へ來り一の柱に縛り置て祭禮の當日に至ば村中の老若男女が柱の周圍を幾度も廻り遂に手を揚て同音に目出度〳〵と叫び暫く踊を爲し會圖を定め不意に一人が柱の下へ走り行ば忽ち數多の甲乙が我れ先と走り行て柱に縛り在る人を搔き捶り皮は破て肉を顯し肉は裂て血を流し骨の見る迄に身体を裁斷し了て止む斯て我が捶取し肉を己が家に持返り之を細に刻み田畑に蒔散し作物の豐饒を待と在り

同じ旅行日記に子供の四五人も在る親は其中の一二人を其筋へ差出し其筋に於は之を集て養育する場所あり恰も監獄の如く數百の子供を束縛し豫て犧牲の備と爲す今を距る四十年前英國陸軍の一隊が此地へ入り斯る惡き習慣を除く爲



め六百餘名の子供を救ひ出せし事あり尙は憎む可き習慣は老年の病人を殺す事にて若し老年の病人が苦む時は親族知音の者が集り斯る老年の病人に長き苦を掛る事は最も情なき業なり疾く之を除く可と相談し適宜の方法を以て之を殺し特に驚く可は大切の老人を土中に埋る事は人の道に非と云ひ一家親族打寄て其肉を喰と在り噫

高山の絕頂に住むコンドス Gonds 蕃人も常に犧牲祭禮を執行す是は十一二才より十三四才の少女を犧牲と爲る習慣にて年頃の少女を盜み來り窃に之を養ひ置て犧牲の用に供す尤も神は血の多き少女を好む者と爲し成的滋養の食物を以て養ひ肥大の少女と成る樣に注意し其日に至ば山羊を屠り村中一統相寄て酒宴を開き犧牲と爲す可き少女に多く酒を飲

し少女が醉て前後を忘し頃及に會圖の太鼓を打ち笛を吹く此時一人の大將が斧を持て進み少女を一擊両斷と爲し數多の甲乙が駄寄て肉を捶り己が田畑に蒔散し其年の豐作を祈る都て犧牲に爲る人をプロンカメダ Peurroncha Medha と稱す犧牲祭禮の習慣は今に存し英國の官吏が最も注意する一事なり僅か廿年前に闍耶補羅 Djaipore の領主が位に卽し祝の爲め領地の各村に少女の犧牲祭禮を執行し特にゼイポールの街に於て數多の人を集め公然と見たる事あり

第三　蛇の祭禮

曩に說ー如く天竺那伽 Naga 蕃人は自ら蛇の子孫と思ひ定め蛇の姿を畫き己の紋に爲る程なれば特に蛇を尊ひ珍た石に蛇の姿を刻み之をナガパンブ Nagapambu と名け乳と油を供て祭禮



を爲すナガパンブは最も好き蛇と云ふ意味なり石に刻る蛇の姿のみならず全く生た蛇を拜み蛇の集る所へ參詣する習慣あり未婚の少女は格別に蛇を敬ひ蛇の穴を見る毎に讃で祈を爲す是は達槻拏 Deccan 領摩臘婆 Malabar 海岸に最も盛なり

摩臘婆 Malabar 海岸に於てマルズ Marhs 蕃人が蛇を拜む事は古も今も變り莫く毎年七月に祭禮を執行す元來天竺は蛇が多く蛇に嚙れ蛇の毒に中り死る者は毎年一千以上も在り故に天竺の人は大に蛇を恐れ害を避る爲め之を敬ひ遂に迷て神と爲す是は亞非利加南部のコンゴー Congo と云ふ國に住む黑人が蛇を恐れ之を神と崇め祭に等し

天竺に於て蛇の祭禮をナガポンチヤミ NagaPontchami と稱ー黑

Krishna 神が閻牟那 Djamna 河に於て大蛇を殺せー日なり故に祭禮を執行し恩を謝し祈を爲と云ふ是は舊希臘國に於てアポロ Apollo と云ふ神がピトン Python と名る大蛇を殺せーと云ふ方便に能く似り而て深く根を探り見に若翰默示錄十二章にミカエル Michael 大天使が大蛇大龍の姿なる惡魔を亡ー云々と在より出たる者にて日本の神道に素盞男尊が八叉の大蛇を退治せーと云ふ話も之に依て出たるには非ざるか疑がはし

ナガポンチヤミ Naga Ponichami に蛇を供物と爲る事は蛇の害を恐れ之を免る爲め祈を爲に外ならずラヂヤの印度日記に由しルスレ Rousselet 氏の誌を讀に婆羅門教の寺院の周圍に祭服を着ー者が多く集り女は顏に絹を蔽ひ歌を唄ひ乍ら往來し路傍に店を出す者も多く在り參詣の諸人は砂糖を携へ來り黑



Krishna の像に捧げ幟を翻し喇叭を吹き燈火を携へ來る紐も在り美麗の駕籠に乘り寺院の中へ入る婆羅門師も在て異口同音に歌を唄ひ來る女の群も在て混雜一方ならずと在り

ボンベ Bombay 府にパイド子 Paidoneh と稱する池あり池の傍に數万の男女が群集し其中にサブヴワラ Sapwallah と名け蛇を使ふ者が二三百人あり

てコブラ Cobra と云ふ蛇二十疋を入し籠を携へ祭禮の儀式を執行す尤もコブラと云ふ蛇は烈き毒を有し之に嚙し者は必ず卅分を經て死に至る故に諸人は大に此蛇を恐れ精撰の牛乳を壺に入て携へ來り之を與ふ此蛇は格別に牛乳を好み壺の中へ頭を入て飲み如何なる場合にも飲み尽す迄は動ず然に蛇を使ふ者が牛乳を別の蛇に飲す爲め初の蛇を除る事あ

り除られたる蛇は大に怨り泡を吹き怒ら傍の人に飛び掛り怨を晴さんとすれど蛇を使ふ者は工に之を捕へ人を害する事なし斯る儀式を長く行ひ一日一夜に五千ヂ千の蛇の腹に牛乳を充し翌日はサルセットSalsetteと云ふ島へ蛇を携へ行て數の中へ放ち以て蛇の害を避る者と爲す

ナガポンチヤミNaga Ponchami の儀式を行ふ夜は暁方より天明まで松明を照し一種々々の鴉物を喚し夥多の男女が市中を徘徊すルスレ Rousselet 氏の説に依れば天竺の人民がコーブラの害を恐れ之を免る爲め斯る祭禮の儀式を執行ー迷の上に迷を重し事は最と古に初り今は第一の習慣と成り除去すべからざる者なり

婆羅門教の定に由り婦人は耳の飾に蛇の姿を用ひ男子は頭を削り中央に少し髪の毛を殘し之を編て蛇の姿と爲す風俗



あり

婆羅門教の聖書大戰 Mahabharata 書の第二卷に蛇の生質を論じ之を祭る以所を載たり日本に於て蛇を辨財天女と稱し祭る事は全く婆羅門教の寫なるべし長崎の諏訪神社は世俗に蛭の宮と云ふ尚ほ他に多く此類の神社あり

第四　生殖機の祭禮

天竺に於て男の生殖機をリンガ Linga と云ひ女の生殖機をヨウニ Yoni と云ふ而て之が形を造り祠と做ひ祭禮を爲す事あり是は寔に耻かしき業にて語も口も忌はしき事なれど天竺の習慣と成り現に在る事なれば止を得ず茲に掲ぐ請ふ之を見て低係數の耻かしく忌はしき迷の淵に沈る事を知り賜へ原の阿利耶 Aryas 人ば決て斯る耻かしき業を爲たる例なく原

の婆羅門教は斯る忌はきし說を述たる所なし讚誦伏陀 Rig Veda 書に却て之を誡めシサナ Sisana 神を拜む者は我等の正き儀式に與る事を得ずと認たりシサナは男の肌と云ふ意味なり

藍摩耶那書に至り初て之を拜む事を認む則ち錫蘭 Ceylon 島の藍摩 Rama 王は到る所へ黃金のリンガを携へ行き臺の上に置て拜と在り

摩提國 Madure 領の或る大寺に一の有名なるリンガあり折節ベナレス Benares 府より婆羅門教の祭司を招じ來り祭禮を執行すリンガの祭禮を婆羅門教に加へ婆羅門教の祭司が之に與り初一年代は大職書を編制せし頃にて基督降生後第九世紀の末なる証據ありて寔に新き事なり

基督降生後第十一世紀に至り彼マホメット Mahomet 教徒が天



竺へ入し頃はリンガの祭禮が天竺全國に行はれ各地に之を祭れる寺あり何も婆羅門教の祭司が祭禮を行ひ特に翌折羅 Guzarat 領のソマナ Somanath 寺が繁昌して常に婆羅門教の祭司が三千人も集り參詣の人は毎年二十萬人に下ざりしがマホメット教の大將マムド Mahmoud と云ふ人が兵力を以てソマナ寺を奪ひ中を調べ見に高さ一丈五尺のリンガあり黃金にて造り其中へ百端の寶物を納たりマムドは忽ち之を毀ち進で他の寺を攻めリンガを恐く潰せり此事は英國マルスマン Marshman 氏の歷史に詳く出て能く人の知る所なり

初はリンガ Linga の形を造り之のみ祭しが日を經てヨウニ Yoni の形を造り共に祭る事と成り進でリンガに似る石を拜みヨウニに似る石を拜む事と成り昔時日本に地藏菩薩を祭し如

く山合の村落に至るまで祭ざる所なき程に成ぬ然ば斯る風俗が佛敎と共に日本へ渡り來て維新以前は各地に之を祭る者あり大坂の今宮祭禮や堺の住吉祭禮に生殖機の形を制し路の傍に賣る者ありしが渡邊知事の注意に由り今は全く消滅せり又た鎌倉の或る寺に近年まで石に刻る女の生殖機あり數多の男女が參詣したれど今は止たり

天竺の摩訶羅 Maissur 領に有名なる自然石のリンガあり高さ七丈五尺にして一本の石なれば最と珍しき參詣の人は恰も蟻の群る如く常に供物は積で山を爲せり

又たボンベ Bubay 府の北の海岸に一個の奇巖あり自然に割て穴を生じ中に小岩を挾たれば女の生殖機に等しく天竺の人は之を呼でヨウニの神と云ひ四季の區別なく參詣して巖の穴を通り高貴の男女も之を恥とせず却て身の清と思ひ定む

今を距る三十年前英國との戰爭に敗て屈辱と成し天竺のラガナト Ragunat 王はボンベ城に禁錮せられ外出自由ならざりしが許を請て北の海岸に至り數回ヨウニの神を拜し巖の穴を通り拔て身を清め返る事ありし

特に笑ふ可は此ラガナト王が身の自由を求る爲め兩個の婆羅門數師を英國へ送遣り彼等の返り來に及で他の婆羅門數師が說を爲て道く彼等兩個は外敵人と交際し既に身を穢たり然ば原の如く潔白なる婆羅門數師の資格を有する能はす故に再び産れ來べしとて金の牝牛を造り尻に黃金のヨウニを附け彼等兩個を口より入て腹の中を通らしめたり是は婆羅門神が牝牛に變生したりとの說あるに由り今此兩個

が婆羅門神の變生したる牝牛より更に産れ出たる容を爲なり両個は止を得ず銀の牝牛の腹を通りしが口よりは出ざりしならん最をかし

リンガの石ヨウニの石を拜む事は舊ギリシヤ舊エヂプト等の偶像教徒がフバルス Phallus と云ふ邪婬の石を拜み舊ローマの偶像教徒がプリヤプと云ふ邪婬の石を拜ー事と同一の迷なり

因に云ふ石は古代の調を爲に便ある者なり佛國が未だゴール Gaule と云し時代にセルト Celtes 蕃人が師匠ドルイド Druides の爲に建し石碑今尚ありて柱の如く直充者をミニイル Menhir と名け臺に載せ墓の上に建し者をドルメン Dolmen と云ひ之が総稱をドルイド石と云ふ



此石天竺の南部伽陀 Gates 山尾底牙 Vindhya 山の谷に多く在て昔時より石碑に用ひ名をドルメンと云ふベンガル Bengale 府の近傍に在るドルメンを除て穴の中を見ば古代の武器骸骨其他數種の品物ありて折節舊羅馬セザル Cesars 帝の古金を認め得る事あり土人は之をウバリヤアル Valyars 人の墓なりと云ぬ富蘭那書に伐臘毘 Vallabhas 人と在もの是ならん

バラバスと云ふ名がウバリヤアルと變りウバリ Ilaa は英語のウヲール Wall なる故にウヲールシユ Welches と變り遂に佛語のゴールと成てゴールワ Gaulois 人と云ふゴールは佛國の古名なり羅馬の古史に依て調べ見に此等は皆な同語にて強と云ふ意味なり

ゴール Gomer 人はジヤベツト Japhet の血統ゴメールの子孫なり

古史にジヤベットの血統ゴメールの子孫が中亞細亞を出てカウカス Caucase 山を越へ歐州北部の諸國に入りダヌブ Danube の河岸よりゼルマン、ゴール、アイルランド Ireland イスパニヤ Hispania イタリヤ等に住み日を經て其中の幾分は地中海を渡り亞非利加に入る者あり東を斥て歩み小亞細亞に入る者あり後ガラシヤ Galatia 領に至と在り今ドルイドの石碑ある國は全く同じ血統の人が住し証據と云も可なり

昔時エヂプト、ギリシヤ、ローマ等の諸國に於て石を拜し如くイギリス、フランス、に於て此ドルイド Druides 石を拜し証據あり然ど基督教會の諭に出て早く之を止たり

天竺プリタニヱ Bretagne 領に一の奇石あり此石に婦人の胸を當ば乳を生じ子を産と云ひ傳へ胸を當ふ行もの多し日本に



赤佛と云ふ者ありて之に我身の痛所を當ば癒ると云ふ迷に同じ最と笑ふ可き事なり

第五　邪婬の惡習

一夫一婦は人の道なり之を犯す者は人に非ず然ど天竺は偶像教に迷はされ道ならぬ道を歩み行て一女數男に見へ一男數女を弄る惡弊に陷り現世後世両個ながら安を得ざる者と成れり克什米爾 Cashmire 領クインバトイル Coimbatore 山の麓に住む者は夫婦の定則なく意氣相投ずる時は忽ち婬ー恰も犬の如き男女の交際なれば常に爭鬪絶間なく爲に人を傷る事あり人を殺す事あり

トチヤール Totiyars 蕃人は夫婦の法を亂し夫の甥や娘の婿に通る事を女の務と爲し神に數の誓を立て多の男に通る事あり

其時は路傍に小屋を新築し往來の男を呼で之と通じ數の滿に至て止む塵提國 Madure 領のカラール Callar 蕃人は大体一人の女に五六人の夫あり子を産む時は此五六人を父と呼せ子も亦た常に五六人の父あるを承知し毫も耻る色なし

婆羅門教は初め一夫一婦の定則なりーが各蕃土人の惡習を掃除する能はず却て之を己の教に加へ方便の說を立たり則ち富蘭那 Purana 書に一人の母が兄弟五人の子を持ちドロパヂ Draupadi と云ふ女を五人中間の妻と爲し云々と在り是は舊約全書に迷が自分で自分の虛を吐と在るに應じたる者ならん

第六　ガンゼス Ganges 河の拜禮

ガンゼス河は婆羅門教佛教の書に詳く出て平蓋天竺人民の拜禮する大河なり梵字の原書に就て之が拜禮の習慣を調る



時は最も怪む可く驚く可き者に似り然ど舊埃及國に於てニイル Nil の河を神と稱し之を拜み之に祈を爲し其他野蠻の人民が得も知ぬ者を神と稱し之を拜み之に祈を爲す事を考へ偶像教徒の常と悟る時は決て怪む可く驚く可き者に非ず此

ガンゼス河は日本の霖雨の如く毎年一定の時節に洪水を出し流水河岸に溢れ河の両傍に在る田畑を潤し植物培養の肥を與ふ之に依て此河を五穀の神と稱し拜禮の習慣を來せー者なり今ペランヂユ Perengler 氏の印度紀行と云ふ書より拔萃して拜禮の習慣を述ぶ左の如ー

ガンゼス河は恰も龍の佃ふ如く無慮六百餘里の虞野に遷流し天竺に在る田畑の過半を潤し流末に至て三町の河幅を有し滔々と流る水は眞に藍色を呈ー一分時間に印度洋中へ落

る量は八万石餘に達す然れば亞米利加大陸に在るミシヽビ Mississipi の河と雖も之に比る時は遙に劣り舊希臘國歷山大王シルス Cyrus 王の時代より有名なる河にて世には是より大なる益ある河なー

ガンゼス河の源はヒマラヤ Himalaya 山の麓に在るガングトリ Gangoutri と云ふ所にて之を天竺の平地に比る時は恰も日本の平地を富士山頂に比る如く高し然どヒマラヤ山は世界第一の高き山にて是より幾倍も高し故に之を麓と云ふ

フラヱール Frayer 氏の旅行日記に此地の景況を詳く述て曰く此地は山の半腹より谷底まで段を築き無花菓芭蕉等を植て畫も暗き程に茂し土地の豐饒を示す余が此地に着や直に土地の婦人が余を迎へガンゼス河の水を捧ぐ余が此時の從者



は印度の人なりしが此れを見て忽ち愼の色を顯し花を採て身を飾り口に婆羅門敎の唱を爲ー乍ら靜に歩み軈て冷水を出す所の氷山に至る冷水の洞中より湧出する勢ひ甚だ強く恰も雷の轟く如き音を發し絶ず人をして戰慄せしむ

此谿谷中に一のガングトリと稱する邑あり是は數万の天竺人民が交代に來りガンゼス Ganges の河源を拜禮する所にて花を流水の中に投ずる者あり身を冷水の中に沈むる者あり何もガンガ〳〵 Ganga と唱へ頻に祈を爲すガンガはガンゼスの神てふ義なり又た一種の旅人が多く來り衣服を脫て總身に灰を蒔き髮を結び手を腰に垂て愼の意を表し口にラム〳〵 Ram と唱へ頻に祈りを爲す土地の人は斯る旅人をジヨグイ Djighi と稱すジヨグイは印度の順禮てふ義にて彼等のラム〳〵

と云ば神を賴てふ義なり

ガングトリ邑の中に婆羅門師が小屋を設け旅人宿泊の厄に供す旅人は小屋の入口を極樂の入口と稱し小屋の裡に於て死る者は最上の幸福を受る者と云ひ竟て小屋の裡に入り小屋の裡に於て死る事を望む然ど偶ま病に罹る者の在る時は直に婆羅門師が來り汝は未だ小屋の裡に於て死る程の德を持ず速に去る可と命じ近所の客舍に移す

ガンゼスの神を祭る宮は泉の上に在り信仰の厚き者は泉の水を德利に詰め婆羅門師に請て德利の口へガングトリ Gangotri と云ふ封印を受け之を携へ返り他の人に與ふ特に厭ふ可は此水を高價に賣ふ者の在に依り狡猾の商人が金儲の種と成す事なり



以上フラエール Fraser 氏の旅行日記に誌せる所なり是より天竺の習慣を細に知す爲めガンゼスの末流支流に在る都市村落の風俗を述べ印度海岸に於て見る所の景況を說ん

ガンゼスの河源を距る遠と雖も同じヒマラヤ Himalaya の山麓に同じ高を有し同く丈を湧出する所あり之をジュンナ Jumna の河源と云ふ梵字の原書にヤムウ Kamuh の河と記せる者にて山の雪より發する水なり數多の人民が此地を聖所と爲し絕す參詣す尤も參詣の時は遠き所に履跡を脫て頭を地に伏て山を拜み其後洗足で除歩く山に登る山の半腹に烝氣を發し岩屈より湧騰する温泉あり湯玉を飛ー瀧の如く流れ落る狀は火山より噴出する者に等し之をジュムノッリ Djimnotri と稱し格別に尊崇す故に貴族の從者は主人の罪を亡す爲め且は

にて今は僅に一二の廣間を存す昔時此宮殿の天井は金銀及寶玉を以て飾り紫震殿中に在る孔雀の高座と云る所は金銀寶玉を以て造り孔雀を両方に比たる者にて今を距る二百年乱に或佛國人が之を見て價を鑑定し三千万圓の高座と云り其後職事に打勝ーベルシヤの王が取て歸り今は如何なりしや知ず今尚權間に一の額を存す額の面に世界の極樂は此所なるべーと刻み在り扨てー蒙古の昔時盛大なりしを知る可しデリ府を出てジュンナ Djumna 河の流に從ひ下る時はアグラ Agra 府と云ふ都に着す是はアラビヤ Arabia の學士が世界に高名の榮耀を集め編ー千一夜の說と云ふ書に出たる都にて蒙古の帝王アクバール Akbar と云ふ皇帝が皇居と定たる所なり數百年間の繁昌を保ち一時は人口萬々に餘り人家の結搆は世界に冠



已が身を清る爲め勇氣を顯し裸体に成て身を熱湯の中に投じ皮肉の焦爛を厭ず憧で蔓陀羅經を唱へ一心に祈念し暫く在て外に出るや其儘、近傍に堀く積る雪の中を奔走し頻に狂ひ廻り以て忠義と稱する事あり其狀は恰も歷史に傳る儕希臘國の歷山大王が勇を振ひアキレス Achilles の墓に於て狂ひ廻りし時の如し

ジュンナ河の岸にデリ府と稱する都あり今尚聖所と稱す是は元の忽比烈が城を建たる所にて昔時は蒙古第一の都會なりしが後ペルシヤ Persia 國メヂルシヤ Madirsha 王が兵を率て侵入し家屋も人民も殘す燒き盡し出て歸る時は路傍に十萬八の死骸ありと正き歷史に傳る所にて有名なる地なり

デリ Delhi 府の古跡を調べ最も驚く可は蒙古の王大なる宮殿

たる者にて宮殿の建築は歐州の舊堂に劣ず希世の石材を用ひ妙巧の細工を爲り昔時此地に回々教の勢力を得し事を知に足べき跡あり

コト Cotteau 氏の旅行日記に於て信じ難き程の珍き事を見る則ち今を距る二百年前に三万の人夫を廿年使用し此地にシヤシアン Shajihan と云ふ皇帝の墓を築き堂を建て之を大タヂ Tadji 堂と名く都て材料は雪の如き臘石と透明の石類を用ひ水品珊瑚其外線色の寶石を以て飾り堂の高は廿六丈に餘り天井は丸く巧に寶石を組合し百端の彫物を爲す皇帝の棺は其下に安置し是も亦た美麗の粧飾を爲り之が建築の入費は凡そ五千万圓と在り

此地にデブアルイアム Dewaniam と云ふ廣大なる建物あり昔時



シヤシアン皇帝が諸事を裁決せし所にて柱は悉く臘石を用ひ中央に臘石の高座を設け皇帝の玉座と稱す之に纏て白臘石の紫震殿あり夫より卵殿に至る其間に硝子の御殿と稱する所あり是は暑中に炎熱を避け冷氣を迎る爲め建たる者にて二重に蠟石の廊下を設け皇帝の浴場を整ひ百端の鏡を掛け庭に蠟石の泉水を拵へ清水を引て瀧と爲し此中に入ば自ら炎熱を消し冷氣を生ず而て別に碁磐の庭と稱する所あり黑白の蠟石を敷詰て碁磐の形を爲す是は美麗の衣服を着し數多の少年を碁石に擬へ皇帝が黄金の鞭を以て自ら之を指揮し彼方を圍み此方を破り圍碁の体裁を爲て樂たる所なり實に希有の工事にて榮耀なる蒙古の昔時を知に足べき者なり

ジュンナ Djumna 河はインドスタン Hindoustan 領に流れガンゼス河に入る尤も六月より九月まで絶ずヒマラヤ山の雪が消て大水を出し河の両傍に在る田畑を潤し五穀豊饒の基を開く

ガンゼス河は水源より海岸まで六百餘里の平野を回流し天竺に運輸の便を興へ往来の船舶絶間なく有名なるベナレス Benares 府は此河の岸に在て印度のゼルザレム Jerusalem と呼れ天竺の中央に位し昔時の繁昌を今に保ち廣大なる寺院あり地勢は恰も扉風を立し如く四方に小山を引廻し其中に婆羅門数回々数の堂塔陛見す

ベナレスの府中に煉瓦石造の家屋は大凡千軒に餘り通常印度風の家屋は其数を知ず中央に婆羅門数の大堂宮中に聳佛堂回々数堂の類は各所に在り婆羅門師山伏其他諸職人等各



自く異様の衣服を纏ひ日夜縦横に往来し殊に天竺人民の敬ふ象の如き大獣が狭き道を遠慮なく険歩など實に混雑を極め四方の小山に至れば白黄赤色の衣服を着し数多の男女が絶ず往来す是はガンゼス Ganges 河へ参詣する者にて林の中を見れば鵄が樹上に喧華し寺院の屋上を見れば数多の猿が百端の遊戯を爲す頭を回しガンゼスの河を見れば数多の男女が日に経文を唱へ乍ら裸体にて遊泳する景況など最と珍し

ラノィ Lanoye 氏の旅行日記にベナレスの府外は周圍に無花果樹を植へ四方に石段を築たる臯あり其傍に一の小堂を設け偶神を祭り之をハヌマ Hanuman の社と稱す余が此所を通る時に破者の破羅門師が一個の小童と其に来り犬の吠る如き聲を出し頼と云ば忽ち数百の猿が顕れ出て道を塞ぎ大に混雑

す聽て婆羅門師が少の食物を投や直に數百の猿が爭ひを初め余の乘ー馬の前後左右に群り來る余は大に驚き馬に鞭を當て漸く猿の園を逃れ近傍に在る狹き街に入れば亦た此所にも小堂あり一個の婆羅門師が白き衣服を着て頭に祈を爲し周圍に數多の山伏と順禮が裸体に成り身に白粉を塗り鎖を腰に付て無花果樹の枝に釣れ數多の犢牛が角に金泊を塗り鼻に飾を付て整列し數多の婦人が短き衣服を着て故と手足を多く顯し一の偶像に油を注き斯る所へ弓矢を背負し山の蕃人が馬に乘て駈け來り實に盛大なる祭典あり之を見る爲め集る所の老若男女は恰も蟻の群る如く彌が上に重り道路を閉塞す故に儀式の行列が通る時は先へ大象を步せ道を開く然に大象が雜沓の中を靜に步み小兒一人も怪我さす事なきこそ不思議なれとあり



ルスレ Rousselet 氏の旅行日記にガンゼスの Ganges 河岸に廣大なる石段あり名てコート Cotton と云ふ此所に異樣の衣服を着し數多の銅色人が住み田日より日沒まで參詣人の爲め清の儀式を行ふ而て儀式を受る者は河岸に至り赤色の鉢卷を爲ー腰に劍を帶ー番人ゐ視の如く若干の金錢を納め番人の指揮に從ひ石段の傍に進む石段の中央に大なる傘あり其下に婆羅門師が彳み手を揚て儀式を受る爲に來る者を招き懇切に儀式の規則を示す此時儀式を受る者は上着を脫ぬ褌で少し髮を切り之を河に投す是は一筋の髮に依て罪の一を免さる可との說ある故なり夫より婆羅門師が河に入り幾度も浮沈し東西南北の四方へ水を投げ儀式を受る者も同く河に入り

經文を唱へ乍ら百端の儀式を受け其後婆羅門師は儀式を受し者に礼と珠數を與へ黄色の花冠を授く儀式を受ー者は珠數を首に掛け花冠を河へ流し各自家路に歸ると在り事實は大に異なれども古へ洗者若輩が納日の河岸に於て亜徳亜人に悔改の洗禮を授し儀式に似り想に之が眞似なるべし都て印度の習慣は有名の學士テルトリヤン Tertullian 氏の説の如く聖公會の眞似なれども偶像敬徒の常と爲て迷に沈み恰も猿が人の眞似を爲す如く自ら身を誤る蔽の多く在は實に憐べき事なり

スリヤヌ Suman 大佐の印度巡覧日記に余はガンゼスの河岸を傳ひモンギール Monghir と云ふ府に至る途中に於て圖ず古き名刹の印度人に遇逅し時候の挨拶を述て次に何地へ行しやと



は此邊に多く居ど人の群集に恐れ此遊泳場へ來る事は甚だ少し然ど水中に於て婦人の手足を拭り金銀の飾環を奪ふ賊の多く在を以て貴顯の婦人は身に鱷の皮を纏ひ衆人に離て游泳する事あり斯る所へ眞の鱷が來り爲人を喰ひ尽して婦人の身に纏し鰐の皮のみ殘せる事など間あり特に憐む可は自ら命を水中に失ひ魂の助を得と欲し空虚の器具を身に附て水中に入り故と死する者あり蓋し空虚の器具へ漸次に水が充て遂に身と共に沈み死す之を見る他の甲乙は大に賞讃し一時は鳴も止ざる事あり天竺一般の人民が悉く斯る迷に沈み之を信る譯に非と雖も水中に命を失ひ神の恵を受け婆羅門教に説く所の極樂往生を望む者の多く在は實に誠に憐べき事なり

經文を唱へ乍ら百端の儀式を
し者に札と珠數を與へ黄色の
數を首に掛け花冠を河へ流し
に異なれども古へ洗者若輩が
悔改の洗禮を授し儀式に似り
度の習慣は有名の學士テルト リヤン Tertullian 氏の説の如く聖
公會の眞似なれども偶像敎徒の常と爲て迷に沈み恰も猿が
人の眞似を爲す如く自ら身を
誤る靡の多く在は實に憐べき
事なり

スリヤヌ Sluman 大佐の印度巡覧日記に余はガンゼスの河岸を
傳ひモンギール Monglir に云ふ府に至る途中に於て圖ず古き名
殿の印度人に遇逅し時候の挨拶を述て次に何地へ行しやと

尋たるに本年六才の弟が病に罹し故に全快を祈る爲め十二歳に成る柔弱の我妻と十八歳に成る別の弟と六才の本人を連て家内不殘出立ーヂヤグルナットDjighornatの御堂へ參詣せー歸途なりと答たり余は暫て印度の習慣を調べ見と思ふ心の在ー故に幸ひ足を停て六才の小兒を眺め該兒は健康に兒も何の病あるや又た如何にして全快を祈にやと尋たるに彼も小兒を顧み今は斯く健康なれど初め肺を傷ひ足腰も立ぬ程の大病なりしかば我等の父母が深く之を悲み且シバ Siva 神に願を掛け全快を求る爲めビシユナトBijhunat の宮へガンゼスの聖き水を携へ行きヂヤグルナットの宮へ參る可き約束をー爲し今や我等が約束の通り釣瓶に水を携へヂヤグルナットの宮へ參り初め父母の掛し願を解き宮を出て歸る時に當り

忽ち小兒の病は全快したりと云ふ余は之を聞て興に入り瓶瓶の水は誰が携へ行しやと尋たるに其は連の者が二個宛携へ小兒は特に少き釣瓶を携へ行り尤も宮の門に至ば婆羅門師が之を受て自ら本殿へ運ふ而て途中は馬に乘し事も在と答へ旅行の里程を問にヂヤゲルナットの本殿より此所まで二百里あり此所よりビシユナトの宮まで百五十里あり夫よりベナレス Benares 府へ廻りガンゼス Ganges の水を汲で家に歸る其道二百餘里と答ふ嗚呼小兒の病を癒す爲め巨額の金を費し家擧て往復千有餘里の長旅に各二個宛の釣瓶を荷ひ行は尋常人間の爲し得さる所なり併し小兒の病は氣候と運動の適度に依り全快せし者にて神の功德に非ず偶像敎徒の常と云ひ乍ら斯る迷に沈む事は實に憐べき限なり若し醫者が學



術の研究に依り病を癒す爲め斯る旅を命る時は之に從や否や恐は從ざるべしとあり

ベナレス府の西の外にダッセヅアメ Dacewameh と稱する波戸場あり高十丈の土堤を築きベナレスの府中を眼下に見渡し朝日の登る時は府中に在る宮殿堂宇の屋上に燐然たる光輝あり無數の老若男女連日未明より參詣して朝日を拜みガンゼスの河中に游泳す上等種族の夫人は白き布を以て身を覆ひ尙ほ他の目を眩し自己の姿を充分に見ぬ爲め光を放つ銅壺を肩に掛け朝日の出る頃は早や游泳を終て家路に走り去る是は下等種族の者と交接を厭ふ故なり

コトー Cotteau 氏の印度巡覽日記に浦頭の石階と河岸の堤防に蹲踞し經文を唱へ乍ら旭日を拜む者の多く在る中に別て子

女を携し婦人を多く認む眼を轉てベナレスの府中を見ば宮廟堂宇納涼場等人家の屋上に聳へ旭日に映て光輝を發し實に比類なき絶景なり尤も此ベナレスBenares府は幾度もガンゼスの河水が溢れ害を受し事の在を以て人家の周圍に堤防を築き百年に餘る無花果樹の大木繁茂す斯て此府は婆羅門神の爲め國民に尊れ恰も基督教國のゼルザレムJerusalemに於る如く國王大臣貴顯紳士は別莊を設け南北諸蕃人の建物とチベットThibetの佛堂とインドスタンHindustanの婆羅門堂が互に美を競ひ人の目を驚す程の一大都府なりとあり

斯の如く毎朝遊泳の爲め數多の人が集り混雜の餘り身に傷を受る者も多く在り偶ま死に至る者は魂の助を得し者と稱し却て喜ぶ程なるが時として鰐の爲に命を失ふ者も在り鰐

は此邊に多く居ど人の群集に恐れ此遊戯場へ來る事は甚だ少し然ど水中に於て婦人の手足を扯り金銀の飾環を奪ふ賊の多く在を以て貴顯の婦人は身に鱷の皮を纏ひ衆人に離て游泳する事あり斯る所へ眞の鱷が來り婦人を喰ひ尽して婦人の身に纏し鰐の皮のみ殘せる事など間あり特に憐む可は自ら命を水中に失ひ魂の助を得と欲し空虚の器具を身に附て水中に入り故と死する者あり蓋し空虚の器具へ漸次に水が充て遂に身と共に沈み死す之を見る他の甲乙は大に賞讃し一時は鴉も止ざる事あり天竺一般の人民が悉く斯る迷に沈み之を信る譯に非と雖も水中に命を失ひ神の恵を受け婆羅門教に説く所の極樂往生を望む者の多く在は實に誠に憐べき事なり

ルスレ Reursel 氏の日記を見にベナレスの游泳場を極樂の門と稱し富貴の人は道の遠近を問ず不治の病に罹る時は必ず此所に來り此所に於て死す若し途中に死る時はベナレスの河頭に在るマニメカの聖地に火葬し灰をガンゼス Ganges の河中に投ず故にマニメカ Mumeika の聖地は毎日數百の屍を燒き火家の屋上に高く聳る丸き煙筒は絕ず黑烟を噴出し惡き臭氣を以て人の鼻を突く火葬人夫が裸体に成り手に鐵の棒を持ち頻に火を動し油を時き火の勢を助る容は恰も佛敎に說く所の地獄に於て惡鬼が亡者を責る如し一數百年氷柱續て燒し屍の骨と灰は忽ち山を爲し自ら數尺の高き堤防と成る其上に數多の乞食病人等群集し眞に醜体を極と在り

貧窮の者はマニメカの聖地に火葬を望むと雖も頭川に堪ず依て

極樂に往生しトリムリチ Trimurti と云ふ三位一体の神の前に出る事を得ず切て屍をガンゼスの河中に投じ此身の罪科を清め定の如く輪廻一再び人間社會に出と憐む可き望を起し恐切に遺言す故に家族及親類は死者の望に任せ屍をガンゼスの河中に投じ鷲の餌と爲す然ばガンゼスの河中に絶ず屍が漂流し來り、水の濁む所は屍を以て之を塞ぐ實に偶像敬の弊害は慨べき者にて悲哀痛嘆た耐ざる所なり

ベナレス Benares の府を出てガシポール Ghazipore の街へ行く途中は頗る絶景にて廣大なる藤牡丹畑あり此邊の住民は藤牡丹花を以て香水を造り之を營業と爲す蓋し數二十万の花莖を潰し目方十匁の香水を得て之を金貳拾圓に賣と云ふ

ガシポールの街を離れガンゼスの流に沿て下る時はパッナ

Patna の府に至る此府の周圍に在る多くの畑は悉く芥子胡麿を植へ此邊の住民は阿片烟草の製造を以て業と爲す阿片烟草は人の精神と氣力を奪ひ大に害ある者にて心ある人は之を厭と雖も此邊の住民は金錢を貪る爲め人の患を顧ず特に憎む可は英國の商人が競て利に走り人間の義務を忘れ此邊の住民と力を協ー專ら阿片烟草の製造に從事し世界に毒を流す事にて是より大なる罪は非ざるべし

ジャコモン Jacquemont 氏の旅行日記に此パッナ Patna 府の景色を記て曰く溪谷の中に無數の村落を散布し一の平地を現出す之れ歐州に於て見る能ざる事なり特にガンゼス河は世界の大河と名に響くゼルマン German 國ライン Rhin 河に五倍ー百端の奇觀を呈す今其二三を云ば朝は山狗の河邊に出て砂上に打揚し人の死骸を



喰らひ夕はアルガラ Argalah と云ふ鳥が出て礒に漂ふ人の死骸を啄む是は鶴の類にて大なる鳥なり其他水鳥此所彼所に游泳し象牛馬野牛駱駝等の大獸も絶ず水中に浮沈し樂む啻に鳥獸のみならず万物の長たる人間さへ塵奴律法に惑溺し此河の水を以て身を洗ふ時は如何なる罪障をも煙滅する者と思ひ老若男女相共に游泳する心情こそ憫然なれ云々

同じ旅行日記にカルクタ Calcutta と云ふ府の事を記て曰く此地に於も毎朝土人がガンゼス Ganges の河水に游泳し罪障消滅の爲め婆羅門敎の唱を爲す而て此地の游泳場は石段の上に廓下の如き屋根を拵へ雨を凌の用に供し石段の中央に絶ず一人の婆羅門師が立て祈禱を爲し病人を擔ひ來る者の在る時は儀式を行ひ病人の顏に白粉を塗り遂に病人を河中に投ず

尤も金持の病人は傍に在る火葬場に於て火葬の儀式を爲と雖も薪を吝み漸く火の燃や直に消て病人は河中に投じ去る然ば死骸を啄む爲に集る鳥は空を覆ひ死骸を喰ふ爲に來る魚を水底に充ち實に慘酷なる有樣にて葬送者の悲み叫ぶ聲と游泳者の戲れ唄ふ聲と一時に耳を徹き余は之を聞に堪ず足を早て急に此所を立去し云々

## カルクタ Calcutta 府

は全天竺諸蕃人の雜居する土地にて各種異樣の衣服を着し老若男女東西南北に往來し又は路傍に小店を開き抱腹絶倒す可き婆羅門數の偶像を排列し之を施人に販賣す貴族の婦人は絶て戶外に出す身に金綢の美服を纏ひ鼻に金銀珠玉の鼻輪を掛け腕に腕輪を飾り足に足輪を箝め裸上の襦干に倚て往來の人を眺め漸く心の鬱を散す貴族の



男子は白の寒冷紗二反を採り一反は腰に纏ひ一反は右の肩に掛け友人と相共に散歩す府中の第一雜踏の地は西洋町と稱し英の倫敦に劣す佛の巴里に譲す常に馬車の往來は恰も蟻の齒を挽が如し

## ガンゼス河

は是より南流して數多の田畑を潤し遂にベンガル Bengale 灣に入る其間無數の市街村落を見と雖も風俗人情は概ね前に說し者の外に出す依て茲に之を省く

## 第七 葬式

天竺の葬式は實に慘酷なる葬式なり今其大畧を說ん天竺に於て重き病に罹る者の在る時はコビラジ Khobiraj と云ふ者を招く之は土地の氣候と病人の性質を調べ多年の經驗に依り諸病を治療する醫者なり醫書はサンスクリット Sanscrit のアシウ

ルウエダ Ayur Veda を用ふ若し醫者が難治の病症と認る時は婆羅門師を招き婆羅門師は病人を且ゼナ、Zanana 卽ち女の室へ伴ひ病人の父母妻子兄弟姉妹を初め親族知音の者を集めサンスチヤナ Sastyana と名る病人の經文を唱へ乍ら諸神に供物を捧げ一心に祈禱し特に籠の神を祭る此時隣家の甲人も皆な集り病人をガンゼス Ganges の河岸へ擔ひ行て一の壇上に据へ病人の額に泥を塗り頭にトルシ Tulsi と云ふ草の花を飾り至親の者が病人の耳に口を寄て汝は疾くガンゼスの流末卽極樂へ行く可と述へ病人の點答を相圖に再び之を擔ひ歸式を行ふ場所に至り復た病人を一の壇上に据へ至親の者が更に病人の耳に口を寄て汝は極樂に於て幸を受べき人なり故に聖き河を拜み河の神に禮を爲す可と云ふ此時病人は頭を回し



最と苦み乍らガンゼス河を見ば既に水葬火葬の式を受し多の屍が流れ來る中に未だ息の絶ぬ者も在り半身燒爛し者も在り全身眞黒に燒ー者も在て見に絶ず忽ち目を閉ぢ頭を低れ震ひ慄く所へ婆羅門師が出て例の如くアンタルジヤ・アルタジヤル Antarjal と云ふ式を行ひ或は水葬と爲ー或は火葬と爲ー驅て親族知音の者は諸神讃美の歌を唄ひ乍ら已が家に返る容は實に慘酷なる事共なり

グランヂギユ Grandidier 氏の旅行日記に信仰の深き病人は聖き御河の儀式を望み頻に之を求むる事あり先頃一個の病人が强て御河の儀式に與り水葬を受て流れ行く容を英國の軍人が認め最と憫然に思ひ忽ち水中へ飛入て之を助け百端說諭を加へ親族へ引渡たるが日を經て病人は本復し熟ら思に我

れ爰に御河の儀式に與り水葬を受け既に極樂へ行く途中不圖英國の軍人に遇ひ近し彼の妨に依て極樂へ行く事を得ず再び家に歸り斯の如く婆婆の街に在り何の面目を以て人に見ん世間へ顏向も成り難く隨て生計も立ち難し是は大なる損なり之が償を受ざるべからずとて遂に裁判所へ損害要償の訴を爲したれば英國の軍人は裁判所へ呼出されたりとあり

シユデルボーズ Shunder Bose 公の天竺習慣集書に天竺人民は御河の儀式を聖び年寄の病に罹る時は頻に勸て之を行ひ未だ息の絶ぬ中に水葬を爲す。故に水葬を受け乍ら死を厭ひ河の岸へ跼ひ揚る者も多く在り余が知る所の婦婦は十二度まで水葬を受て尙は死ず河の岸へ跼ひ揚りしかば親族は世間へ耻て厚く說諭を加へ本人も流石に面目なくやありけん遂に



ガンゼスの河中に自ら身を投じ死と在り

凡て死者の子は身に白衣を纏ひ喪禮を守る喪禮は初め嫂の火を以て聊か手の指を燒き男子は女室の入口に於て大聲に叫び女子は女室の中に於て終日動哭し其後上等種族は十日下等種族は四十日精進し一切肉食を絶て野菜菓物を食す尤も葬式の十五日目に親族朋友を招き葬式の粹なく清たる祝を爲す此日は衆人を經應し一大酒宴を開く故に多額の入費を要す而て廿日目に婆羅門師の家內不殘下婢下僕に至る迄も悉く招き酒食の振舞を爲す此日も之が爲に多額の入費を要し廿一日目に死者の家族が婆羅門師と共に打連てガンゼス Ganges の河岸に至り清の儀式を執行す之を終の清と云ふ此日は數多の山伏が死者の家族に布施を求め若し些少の施物

を與る時は異口同音に罵詈讒謗し此度の死者は極樂へ行き難し地獄へ行と叫び回る故に止を得ず充分の施物を與ざるべからず依て此日も多額の入費を要す併し近來は英國警察官吏の注意に依り斯る惡弊は聊か減じたり然ど終の清を濟ー家に歸る時は庭前に幕を張り中央に數多の婆羅門師が座ー周圍にポンジ Pundits と云ふ學者の組が整列し尚其周圍に士族蕃人が整列し婆羅門師の前に檀を築き貴族富者はルピー Rupee と云ふ大判小判の類を山の如く盛り其他金銀の飾を爲し樂を奏し歌を唄ひ祭典を執行し終て酒宴を開く尤も死者の母妻娘姉妹等は凡て奥に在る女の室に隱れ客に見ず祭典の初る前に潛と幕の外へ來り幕の内を窺ひ軈て祭典の初る時に當り大聲に泣叫を親族が懇切に慰め漸く女の室へ伴ひ



返と雖も尚ほ泣叫て止ず祭典の終に至も尚ほ泣叫て狂人の如し然ど婆羅門師を初め他の甲乙は毫も之に拘ず競て鯨飲牛食し果は檀の上に在る大判小判の類を金銀の器に入て己が家に携へ歸る格別に婆羅門師は多く携へ歸り翌日は婆羅門師が多く來り再び庭前に幕を張り酒宴を開き乞食に餅を施す此日も亦た死者の家は多額の入費を要す其の如く數回入費を要する事あり故に中等以上の家に死人の在る時は貳千圓前後の金を要ー之が爲め財産を失ひ或は負債を釀ー家を破る者も多く在り

シユデルボーズ Shunder Bose 公の天竺習慣集書に此程グンガゴヒセット Ganga Gobind Set 公の母が死去し葬式の食物に用る油を造る爲め廣き穴を堀り數多の人を使役す尤も食物は積で山

を爲し金銀銅鐵の器具も隨て多く庭園の周圍に陳列し恰も兵士の整列の如く日に映て輝き數千れ賓客は美麗の珠物に座し口の廻に飾の在る粢が多く立ち婆羅門師學士は死者の名を刻し小判を銀の器に盛り已が前に据て唱を爲しカイス

タス Krystas と云ふ士族の組とスダラス Soudras と云ふ商人の組とは草の上に座し分金を盛し銅の器を已が前に置て唱を爲す葬式の施物を貰ふ爲め來し乞食は幾万と云ふ數を知ず之が爲に費す所の金は六拾万圓に餘る嗚呼此金をーて有益の事に使用したらんには人民の幸ひ大なるべしとあり

第八　婚禮

天竺の婚禮は初め縁談の在し両家の親族が相集て協議し容易に決し難く數多の日子を費し漸く決議の上パトラ Patra 即ち約定書を取交ー神の名を呼で誓を爲す尤も約定書の紙は古來の習慣に依り必ずベンガル Bungale 府の紙を用ひ之を認る時の筆も必ずベンガル府の筆を用ひ之を認る者は婆羅門師に限る而して之が行數は必ず三五七九の奇數に認む是は婆羅馬僧希臘等の偶像敬徒が奇數を尊し迷の餘具を有せる者



なり

此約定書に印を捺す日は両家の親族が贈を贈り両家の主人は親族を集め祝宴を開き婚禮の日を撰む若し此日草中に蔦の在を認め或は牝牛の吼く聲を聞く時は最上の吉兆と爲し虎蛇の類を認め或は猫狐の聲を聞く時は凶兆と爲し日を延す事も在り又た之が爲に折角の良縁も破談する事あり

凡て四季の首日を吉辰と爲し大体は此日に婚禮の儀式を執

行す而て婚禮の儀式を執行す定日より一周間前に兩家は頗る美麗の裝飾を爲し門前に一の高臺を築き其上に額を掲く額は婆羅門師が筆を採り新夫婦保助と認め定日の前晩に至れば高臺の上に金箔の天蓋を釣り數多の音樂師及參者を集め奏樂踏舞を催し一家内不殘祝服を纏ひ祝宴を開く祝服は白衣に赤の襟を掛たる者なり

婚禮の日は曉天に兩家の親族朋友が一大行列を以て安額の河岸に至り互に祝詞を述べ且づ婿を迎へ來り次に嫁を伴ひ來る而て此新夫婦に河の水を灌ぎ大勢が異口同音に蔓陀羅を唱へ淨の式を行ひ男女相混て百端猥褻の話を爲し婿の親族朋友は婿を連て婿の家に歸り嫁の親族朋友は嫁を連て嫁の家に歸り双方一大祝宴を開き夕方に婿は美麗の衣服を纏



ひ首に珍珠の珠數を掛け手に寶玉の輪を箝め金箔の飾り在る青色の馬車に乘り兩個の兒童に陽扇を以て扇せ先ら嫁の家に至り嫁を連て己が家に歸る丸も親族朋友は色引の提灯を携へ或は花の飾を爲ー松火を持て馬車の前後に從ひ行き歸は嫁の親族朋友が同く馬車の前後に從ひ送り來る

婿が嫁を迎に行く爲め家を出る前に婿の父母が婿に向ひ汝は何所へ行く哉と尋ね婿は愼で父母に向ひ汝は下女を探しに行く矣と答ふ是は口頭の問答に非ず元來天竺は眞理の宗教に離れ夫婦の大道を誤り婦は夫の一玩弄物と成り具姑の下女と成る可き者と思ひ定むる故なり

嫁の家に於て婿の來を待ち漸く婿が門に入や直に樂を奏ー夥多の參者が師り作ち迎て奥の室に伴ひ寶玉を以て飾ー椅

子を出す婿は之に膝を掛け軈て下婢の捧げ来るベテル Betel を食すベテルは烟草の類にて食する物なり暫く在て婆羅門師が来り此家の系圖を朗讀す茲に最も憎む可は賄賂の多少に依り婆羅門師が此家の先祖を褒貶する惡弊あり

斯て其後別室に入る此室は正面に金銀の縫箔を以て飾し擅を設け新婚夫婦の夜具衣服珠數腕輪指輪の類を並べ眞中に安額の聖水を入し寶石の器を備へ天井に金銀瓔珞の天蓋を釣り四方に金銀縫箔の幕を張り鹿の皮を敷り新婚夫婦は鹿の皮の上に坐一束の方に向ひ愼で在る所へ婆羅門師が来り彼等両個に麥の如き草の穗を與へ子孫の繁殖を表し次に擅の上に備へ在る寶石の器を取り其中に在る安息の聖水を両個の頭に灑ぎ清の式を行ひ次に花繩を以て両個の手を繋ぐ



風呂敷の如き布を被ふ両個は在の下に於て小聲に談話し階老同穴の夫婦を結ぶ其間父母兄弟姉妹親族朋友相共に墓陀羅を唱へ螺を吹き鼓を鳴し最と騒し暫く在て布を取れば両個は出て奥の室に入る奥の室の入口に嫁の父母が待受て婿に扉の糸を示し之を以て汝を繋と云ひ又た一の梭を示し汝は之を以て働く可と云ひ終て汝は示來我家の羊なりといふ此事に就て最と可笑談話を聞り或る少年が歐米名國の事情を調べ大に感服しカルカタ Calcutta と云ふ所に在る英學校に入り百般の學科を修め家に歸り妻を娶る時に當り止を得ず婚禮の儀式に與り布の下の契る滿て例の如く奥の室に至れば入口に嫁の父母が持受て扉の糸と梭を示し定の詞を述べ終に汝は示來我家の羊なりと云も然ざるに少年は忽ち大聲を揚

てベエー〳〵と叫び羊の吠る眞似したれば誰も彼も大に驚き是は癲狂なり痴僕なり破談せざるべからずとて父母は齒嚙を爲し嫁は涙を浮め親族は歎息し容易ならぬ景況なりしが少年は大に笑ひ諸人が餘り無益の習慣に耽り玉ふ故に我は之を見に耐ず一時の戯言を爲たりと答しかば漸く破談の事は止て一條物語の種と成れり

斯て奥の室に入ば嫁の母が小き錠を携へ來り婿の唇に當る是は家内の事を他言すべからずとの誡なり次に砂糖を婿の口に入る是は嫁に甘かれとの敎なり次に夫婦交情の藥と稱し紅の花を新婚夫婦の身體に塗り蜂密を以て足を洗ひ次に夥多の神を呼び太初人類の元祖に神力を賜し如く今此夫婦に神力を賜と祈り次に酒宴を開き此日の儀式は終るラノエ



Lanoye氏の日記を見に此日儀式の終に當り婿が不意に立て嫁に向ひ我は汝と緣を斷り世界万國を周遊す汝は身を大切に扱ひ父母に孝を尽す可と云ひ聞せ旅行の支度を調へ行季を負て門を出ば親族朋友が提灯松明を照し跡を追て之を止め汝は美麗の妻を與ん兎も角も返る可と勸め強て伴ひ返り螺を吹き皷を鳴し一大酒宴を開と在り

次の日は衆客の目前に於て新婚夫婦の身體へ白米七升酒乳七升清水七升を灌ぎ婆羅門師が摩拏律法の第三章を讀む曰く婦は夫を神の如く荷ひ老て醜き姿と成も厭ず大切に扱ひ夫の笑ふ時は婦も亦た笑ひ夫の泣く時は婦も亦た泣た夫の語る時は婦も亦た語り夫の默す時は婦も亦た默す可と而て復た酒宴を開き夕方に及で婿は嫁を伴ひ嫁の家を辭て己の

家に歸る尤も婿は馬車に乘り嫁は駕籠に乘り數多の藝者が馬車と駕籠の左右に於て歩き乍ら踊を爲し恰も群鳳の桐花に戯る如く最と麗し此時親族朋友が前驅後從し眞先に騎兵が進み路傍の人を拂ふ容は王公の通行に異ならず

新婚夫嫁の馬車と駕籠が婿の家に着や直に婿の父が立て安額河の水を夫嫁に濃に細帶を以て両人を縛り引て奥の室に入る奥の室に夥多の少女が待兼て在り嫁を見や直に之を抱き大奥の女室に携へ行く大奥の女室に婿の母が居て嫁を迎へ嫁の両腕に金銀の輪を箝め左の手に鈇の輪を箝る是は愛を以て夫に繋がれよといふ徴なり次に嫁の耳へ蜂密を塗り口中へ砂糖を入る是は甘き心を以て夫の命を聞き夫の爲に出す詞も甘かれとの徴なり其間に下婢が銅の椀に乳を入て



携へ來り爐に掛て煑ば忽ち沸騰す嫁は之を見て嬉し氣に笑を含み我が夫の家は米麥諸産の湧き出る斯の如と云ふ其時夥多の少女が出て嫁に百端の物を與へ嫁の耳と鼻に寶石の輪を着け或は金銀の飾を爲す是は摩拏律法に妻は夫の愁を求る爲め寶石金銀の飾を爲す可と在に依て也

婚禮の儀式は概ね斯の如し然ど嫁は大体年齢十二三歳の少女なれば夫の家に止る事を厭ひ頻に歸鄕を請願す依て土産を持し歸鄕を許す習慣にて歸鄕せし嫁は両三年を經て再び渭の式を行ひ一大行列を以て夫の家に入る此時婆羅門師が多の神を祈り種々の供物を爲す中に就て最も笑ふ可は牝牛の糞と犢の尿を供へ頻に經を讀み其後新婚夫婦の親族朋友相寄て酒宴を開き茲に婚禮の儀式は全く畢る

斯く調べ揚て天竺の情態を見に一も人間の摸範と成べき者なし之を基礎に說を爲す世の哲學者流は實に憫べき者なり尤も阿利耶 Ariyas 人の習慣は聊か見る所あれど是は公敎の摸擬にて彼等の專有に非ず請ふ三の卷に詳く說を見て知り賜へ

婆羅門敎論卷之二終



婆羅門敎論卷之三

## 婆羅門敎の變遷

婆羅門敎は初め一体の神を信じ眞正の宗敎に近かりしが時勢の變遷に順ひ人間が自己の憶測を以て百端の解釋を附し一種の哲學と成て逐に佛敎を產出せり故に佛敎の根を探る者は天竺の古跡に就て昔に溯り止を得ず婆羅門敎の調に蒐る是は日本天皇陛下の血統を探る者が日本の歷史に就て昔に溯り止を得ず神代の調を爲と同一の釋柄なり

婆羅門敎は婆羅賀磨と云ふ神が人に授し敎の如く云ど決て然に非ず婆羅門敎の基礎たる伏陀 Veda と云ふ聖書を調べ見毫も婆羅賀磨と云ふ神に關する所なく婆羅賀磨と云ふ神の名だに見へず尤も婆羅門 Brahmanas と云ふ名は在ど神の名に非ず

坐禪の修行を爲す仙人の通稱なり宗教が哲學と變る時代に學者が初て伏陀の註釋に依て婆羅賀磨と云ふ名を揚れと神が人か漠然として明瞭ならざる法律の時代に至り漸く之を無上至尊の神と定め大に婆羅門教を擴張したり

然と婆羅賀磨と云ふ神は漸次に勢力を失ひトリムリチ Trimurti と云ふ三位一体の神の中に一の位を得て僅に名を存し他の神が日に月に殖て婆羅門教は遂に多神教と變じ偶像教と化す故に婆羅門教の調を爲す者は之が變化を三派に大別し一を伏陀教と云ひ二を婆羅賀磨教と云ひ三を信度 Indu 教と云ふ伏陀教は伏陀と云ふ聖書を基礎と爲し太初阿利耶 Aryas 人の奉信せし宗教なり婆羅賀磨 Brahma 教は律法と哲學を基礎と爲し中古天竺人民の奉信せし宗教なり信度教は卽ち今の印度



國民が奉信する宗教なり

斯の如く三端に大別すれど教旨の根據と目的は異なる所なし故に之を都て婆羅門教と云ふ婆羅賀磨は上帝と云ふ意味あり拜禮と云ふ意味あり既に拜禮を爲す他人と云ふ意味あり因て婆羅門教は拜禮儀式習慣の三を以て婆羅門師が之を維持し婆羅門師は大に人の尊信を受く而て拜禮儀式習慣の三は時勢に順ひ變遷したれど婆羅門教は神を拜するに非ずして今も異なる事なし然れば婆羅門教は神を拜するに外ならず

婆羅門教は初め伏陀書の時代に之を一定せんと欲して果さず律法の時代に一定し佛教が勢力を失ふ時代に信徒の起り時代に大變革を爲し佛教が勢力を失ふ時代に不規なる經論あり哲學の時

を殖す爲め各蕃土人の習慣に順ひ偶の神を祭り遂に今の如く腐敗の宗教と成たるなり今其大畧を說く左の如し

第一章　伏陀時代の婆羅門教

伏陀Vedaと云ふ語は見と云ふ意味あり最も高尙なる學問と云ふ意味あり梵語に之をウイドVidと云ふ伏陀書は四部に分ち一を讚誦伏陀Rigvedaと云ひ二を夜殊伏陀YadjurVedaと云ひ三を娑摩伏陀SamaVedaと云ひ四を阿闥婆伏陀AtharvaVedaと云ふ而て原の伏陀書は古代の文法二を用ひ今は梵語の伏陀書と大に意味の異なる所あり

讚誦伏陀は最初の編纂にて筆を信度Indus河の河岸に始め恒河Gangesの平原に終る是は數多の博士學士の手を經て數百年間に成たり者なり書中一千餘首の聖歌を集め神を讚美し阿利耶Ariyas人の系譜を揚げ恰も阿利耶人の日誌の如く阿利耶人が各蕃土人の妬を受し事など詳く述たり文章は隨分高尙なれどマックスムレールMax・Muller氏は之を卑め一も舊約全書に在るダビドDavidの聖歌に比較すべき者なーと云り



娑摩伏陀は讚誦伏陀と同じ組立にて同じ聖歌を揚げ祭禮の儀式を行ふ時に笛を付て唄ふ爲め編たる者なり

夜殊伏陀は黒白の二卷あり一は意味の解し難き所の多く在る故に之を黒夜殊書と云ひ一は容易に意味を解し得る故に之を白夜殊書と云ふ

阿闥婆伏陀AtharvaVedaは最終の編纂にて年代も新く讚誦伏陀と反對の說も多く在り一の例を揚て云ば讚誦伏陀に於て神を祓ふ所を阿闥婆伏陀に於て惡魔を排ふ術と爲す是は阿

利耶人が各蕃土人と交り志操を變たる証なり

然ば讃誦伏陀は阿利耶人が信度の河岸に住し時代に著ー婆摩伏陀は讃誦伏陀の聖歌に節を付たる者にて讃誦伏陀の遙か後に著ー夜殊伏陀は阿利耶人が恒河の平原に住し時代に著し阿闍婆拏伏陀は阿利耶人が天竺の山奥に入り各蕃土人と交際を結し後に著し其間幾數百年の隔ある明なり

凡て伏陀に説く所は一体の神が世界に洞滿ー万物を發生す故に万物は皆な神の性を有ー神ならぬ物なしと云に在り是れ全く神の性を知ざる者にて佛敎に眞如法性と云ひ國土草木悪皆成佛と云が如く甚だ理に戻れる者なり

伏陀の中に一定不變の神なく神は時勢に逐て興廢し恰も物の流行するが如し中に就て最も古く名の在る神は阿耆尼 Agni と云ふ火の神なるが是は万物を温め万物の生命を守る神と云ひ之を拜ひ事は昔阿利耶人が中亞細亞より擕へ來れる者にて舊約全書にバビロンの異敎人が之を拜む事を誡せ波斯 Persia の子孫たる今のパアルシー人も之を拜ひ習慣ありといふ



次に古き神を因陀羅 Indra と云ふ是は空の神と云ひ雨の神と云ひ軍の神と云ひ國を護る神と云ひ特に阿利耶 Aryas 人の敬へる神にて伏陀の中に多く此神を讃美せる聖歌あり

トリムリチ Trimurti と云ふ三位一体の中に一の位を占しウイスヌ Vishnu と云ふ神は伏陀に名が顯れ古き神なれと同じ一の位を占ー婆羅賀磨と云ふ神は後に出たる神にて婆羅賀磨と云ふ神の出し後は更に多の神が出て大に混雜を來ー終て濕と

云ふ者が顯はれ鬼と云ふ者が顯れ遂に一種特別なる阿脩羅Asuraと云ふ靈が出て形を表し佛教の蔓を傳ひ遠く日本へ渡り今尚各宗本山の欄間なんどに彫刻せられて形を存す

婆羅門師は數多の神が尊敬を受る景況を見て己を神の一分に編入し伏陀の中に祈禱を捧る師は神に等と云ふ句の在を幸ひ自ら祈禱の神の母と稱じ大に尊敬を受く蓋し婆羅門師の說に世界は諸神の力に悉し諸神は祈禱に順ひ祈禱は婆羅門師が之を爲す故に婆羅門師は神なりと云ふ

婆羅門教に婆樓那Varunaと稱する神あり舊希臘人はウラヌスUranusと云ひ佛教に毘盧遮那Birushanaと云ふ婆羅門教の說に此神は世界を造り自ら之を護る故に此神の性は世界に圓滿し雲を渡る日輪は此神の目の如く空を走る風は此神の息の如



し此神は能ざる事なく知ざる事なく惠ざる事なく常に一定の命令を出と云ふ是は全能全智全善の天主に能く似り

凡て婆羅門教の說は瞬眛の中に一体の神を存し天主の正き說を含む是は初め伏陀Vedaの作者が一体の天主を知と雖も其性を充分に悟ず己の想像を以て誤を傳へ後の人は益す誤り一体の天主を忘れ多の神を拵へ遂に婆羅門師が己を神と稱し愈よ誤を傳へ果は迷の淵に沈る者なり

伏陀の作者は一体の神を上靈と云ひ有者と云ひ歌に方言を以て彼と云ひ御方と云ふ而て讃誦伏陀RigVedaの歌は多く上靈有者の性を質せる者にて今其二三を云ば左の如し

誰が彼の產ー事を見たるや誰が彼に近付たるや

天地万物を造り不滅の姿にて比なき彼は誰なるや

世界を支配する者は誰なるや他人が我等に示す可し
我等の親は万物を生じ之を護り玉ふ一体の神なり
諸の神は彼より造られ都て生る者は彼を主と爲す可し
始は万物なく晝夜なく彼のみ存せり
彼の思に山り万物の種が出たり
御方は世界の造主なり御方は世界の謎者なり
御方は天に在て此全世界を眺め万の事を知り給ふ
一体の神に就て佗に説く所は概ね其の如く舊約全書に説
く所と能く倣り是れ全く婆羅門師が未だ伏佗を編ざる前よ
り如徳亜人と交際し大洪の遺傳に係る創世造物の正き説を
聞て後に伏佗を編たる故なり
舊約全書に紀元前千二百年の昔ノア如徳亜人の舟がナイル Tyr



の解と共にオフィル Ophir へ渡と在りオフィルは即ち今の天
竺なり以て婆羅門師が如徳亜人と交際の古を知る可し
紀元前七百年に至りバビロン Babylon のナブコドノゾル Nabuchodonosor
と云ふ王が兵を師て如徳亜國を攻め數多の如徳亜人を已が
領地の人民に天主の全能を知す爲め
再三布告せし事あり此時の布告は石に刻み今尚保存せらる
當時天竺は波剌斯 Persia の王がダニエル Daniel 書を見に波剌斯
深く天主を信仰し已が領地にして此王の支配なれば婆羅門師
は再三の布告を諷み止を得ず天主の全能を悟ー事あらん

斯の如く關係あるを以て伏陀の作者は舊約全書の說を引て伏陀を編たる者なり然と反對論者は却て舊約全書の作者が伏陀の說を引て舊約全書を編一者の如く云り故に伏陀を編し時代を調べ舊約全書を編し時代に比て之が新古を明瞭ならしむる事は實に緊要の業なるべー

伏陀を編一時代を確めんと欲するも書中年號を載ざる故に極て困難なり然と歐州の學士は倦ず撓ず之が調を爲一時に英國政府は天竺に領地の在を以て數多の學士を派遣し莫大の費用を拋ち婆羅門數の聖書を綿密に調べ其中に在る仙人と國王の名を現在の古跡に照一漸く證據を得て年號を探求し論理の推斷に由て時代を確むる事とは成れり

ウイルヤムジョンス William Jones 氏は亞細亞研究書第貳卷に於て伏陀は紀元前千二百年代に筆を初し者と云ひコールブロク Colebrooke 氏は亞細亞研究書第七卷に就て說を爲し伏陀は紀元前千四百年代に筆を初し者と云り此兩學士は伏陀の中に在る聖歌に述一天文學の說を證據に引れる者にて此說は紀元前千四百廿六年に初て顯れ夫より前には人の知ざる說なり



歐州學士の調に依ば此天文學の說は天竺人の手に成し者に非ず天竺人が希臘人亞剌比亞人より數られ後に之を伏陀の中へ編入たる証據あり尤も伏陀は前に述し如く數百年間に編たる者にて當蘭那 Purana 書を見に伏陀を編し者は廿八名の毘耶婆 Vyasa と稱し紀元後千百年代に生存せし証據わり

今を距る百年以前婆羅門師の中にモウムロイ Mohun Roy と云ふ高名なる博士あり此人伏陀編纂の時代を論じ凡そ二千年の昔時と云り然ば紀元前二百年なり又梵字 Sanscrit 即ち梵字の文典に明達して有名なる英國の學士マックスムレール Max Muller 氏は紀元前八百年と云ひ佛國の學士ブルヌフ Burnouf 氏は紀元前數百年より古からずと斷言せり

斯の如く諸學士の調に年代の相違あり而て最も遠き年代を採も紀元前千四百年に過ず好や伏陀は紀元前千四百年に筆を初ー者と見も之を紀元前千七百年の編纂に係る每瑟の五經に比る時は新く且つ筆の終を黑の生存に由て紀元後千百年代と見ば特に新く舊約全書と比べうもあらざるなり尙ほ左に條を逐て証を揚ん

第一條　伏陀起筆の年代

讃誦伏陀 Rio Veda の中に在る聖歌は天竺に於て作られし者ならん併ーブルヌフ氏の說に依ば阿利耶人が天竺へ入ー初は紀元前千五百年代なりウイルヤムジヨンス William Jones 氏の說に依ば紀元前二千年代なり其他學士の說に多少の差異を見と雖も概ね天竺最初の社會は舊約全書に在るアブラハム Abraham の時代即紀元前二千三百六十年より古からずと判斷ー得べきなり

英國海軍中佐トッド Tod 氏が論理の定則に由り天竺建國の年代を推斷せし事あり之が順序を見に且富蘭那 Purana 書に於て阿闍多設咄路是即阿闍世 Ajata Satru と云ふ王の名を認め次に此王の即位八年は釋迦の死去せし年なる証據を認め之を紀元

前五百年と知り而て此王は大戰 Mahabharata 征伐の大將摩伽陀國摩訶提婆 Mahadeva 王より三十五代の相續者にして古に溯る時は尙ほ五十五名の王あり之が在位を平均二十年宛と假定すれば建國の王は紀元前二千二百年代に當と推斷せり併し此說に反對の証據を提出し恒河 Ganges の河岸に摩伽陀 Magadha と云ふ國を建し事は大戰征伐の後に在と痛論せし學士あり今諸學士の說に任せ好や天竺の建國を紀元前二千年代と見も之を以て舊約全書を古と云ふ說に傷る事を得ず蓋しノエ Noe の大洪水は紀元前三千三百年人民の各地に分離せしは紀元前二千九百年バビロン Babylone の建國は紀元前二千六百年エヂプト Egypt 國王第二の相續者たる血統の初は紀元前二千五百年アブラハムの時代は紀元前二千三百六十年舊希臘の



歷史は紀元前二千三百年代に初て起し等の証據明白なり

ウイルヤムジョンス William Jones 氏コールブロク Colebrooke 氏ドプア Dubois 氏を初め其他學士の說を斟酌し確實の証據に依て調べ見に阿利耶 Ariyas 人が中亞細亞を出て信度 Indus 河岸に移し年代は紀元前千八百年なり又阿利耶人が天竺の北部に蔓延し王を立し年代は紀元前千五百年なるべし如何となれば

リッグウエダ Rig Veda の中に阿利耶人は信度の河岸に移り數百年間君主を立ず其後恒河河岸に地を領し初て王を立と在り且は地理學者の說に王の城を築し年代を紀元前千四百年より古からずと云ひ又トラニヤン Turanian 人が中亞細亞に內亂を起し各蕃土人が中亞細亞を去り天竺に入て閑靜の居所を求し年代は紀元前千七百年にて阿利耶人も此時天竺へ渡し

証據あり然れば讃誦伏陀の筆を初し年代は紀元前千五百年よりも古からずと推斷せざるべからず

第貳條　伏陀編纂の年數

伏陀の四書は數人が數百年間に編たる者にて末の分は釋迦の時代を過て基督降生の後に編たる者なり尤も之が筆を終し年代を紀元前九百年と云ひ或は紀元前千四百年と云ふ者も在れど聖歌の事實と文章の規矩を見れば彼等の說を打消すべき充分なる證據ありコールブロク Colebrooke 氏は聖歌の事實と文章の規矩を細に調べ是は數多の作者が數百年間に漸次編入たる者なり特に補盧娑 Purusha 神を讃し歌の類は最も後に編入たる者にて之が事實は紀元後ウパニサ敎の時代に在と云り又讃誦伏陀の中に大戰 Mahabharata 征伐の後恒河 Ganga 河の邊に



住し讃王の名を認ひ是れ則ち此王の時代にも編入たる證據なり然れど讃者の倦怠を慨れ僅に二三の王名を左に引照す

今のベナレス Benares 府を昔は波羅那斯領と云ひ此地の王ザーボダサ Divodasa の名が讃誦伏陀の中に顯れ王の自ら作し歌も在り此カシ Casi 城の建設は紀元前七百年にてザボダサ王は釋迦の時代に生存し釋迦の弟子と成り佛法を學し證據あり又

ベンガル Bengale 領羯饒伽 Kalinga 城の王カシヴァン Cakshuvan の名が讃誦伏陀の中に在て他人と稱す此ベンガル領へ阿利耶 Aryas 人の初て入し年代は紀元後二百年なり地理學者の說に紀元後阿利耶人がベンガル領へ初て入り恒河河に支川を設け水を引一證據あり

第三條　伏陀 Veda 撰筆の年代

伏陀の四書を編し者は毘耶婆（Vyasa）と云ふ、二十八名の仙人にて富蘭那（Purana）書の中に悉く名が顯れ最後に筆を採し仙人は黒（Krishna Dwaipayana）と稱し紀元後千百年代に生存せし者なりウイルソン（Wilson）氏の說に依れば如何に反對論者が氣力を勉し驅撃するも遂に曰を晩き舌を巻て去の外なき確然なる證據あり則ちウイシヌ富蘭那（Vishnu Purana）書の中に黒と云ふ仙人が伏陀とウイシヌプラナを編し事が明に顯る然ば黒は伏陀を編み又たウイシヌ富蘭那を編み其後死去せし者にて紀元後千百年代なり故に伏陀の筆の終は紀元後千百年代と推斷せざるべからず斯の如く條を別て伏陀の起筆年代と編纂年數と擱筆年代を細に調べ舊約全書に比べ見る時は舊約全書は古く伏陀は新



し然ば全く舊約全書の說を採り伏陀を編たる者にて伏陀の說を採り舊約全書を編たる者には非ず仮に伏陀を舊約全書より古と見るも伏陀は俗なり舊約全書は聖なり豈に俗なる伏陀の說を採り聖なる舊約全書を編の理わらんや殊に伏陀の中に在る聖歌と稱る者は皆な毎惡の時代より遙か後の事實を述たり是れ卽ち後に編たる証ならずや

## 第二章　婆羅門教の哲學

讃頌伏陀（Rig Veda）の始に在る聖歌は大に主意の異なる所あり是は漸次に阿利耶人の思想が變り遂に理論の一端に偏り万物の發生と天地の成立と人間の擧動に就て百般の說を爲し專ら哲學を重る樣に成たる故なり阿利耶（Aryas）人は各番土人と交り年を經て言語に變化を來し

爲に過半は伏陀の意味を解し得ぬ樣に成たれば人ありて皆
く之を悲み伏陀の聖歌と祈禱に注釋を附たれど尙は漸次に
種族繁殖し領地の增に從ひ拜禮の道を忘れ迷に墮る者の多
く在る故に之を防ぐ爲め伏陀の外に聖書と稱する者を著し
并禮の儀式と婆羅門師の責任を論ずるに至れり
婆羅門教の中に新著の聖書が現出し在來の諸神を盡く廢棄
するに非ざれど新に婆羅賀磨 Brahma と云ふ上靈の神を發生し
之を天地万物及諸神の造主と定たるより宗旨と哲學の兩組
に分れ神の性質と人の諸德を論ずるに至れり新著の聖書と
稱する者は婆羅門 Brahmana 書スートラ Sutras 書ウパニサダ Upanishada
書の三なり
婆羅門書は神の點示に出し者と云ひ扨て婆羅門師の責任と



神に仕る儀式を示す卽ち讚誦伏陀の註釋なる分には祈禱續
經の規則を示し他の伏陀の註釋なる分には神酒供物を捧げ
犧牲を奉獻する儀式など詳く示す而て此婆羅門書は紀元前
千八百年代に編し者と云ふ說あれど空論にて証據なしシャ
ンドが婆羅門 Chandogliya Brahmana と云ふ大切なる註釋は著者クマ
リラ Kumarila 他人の生存を証據に紀元後八百年代の著書と知
を得修多羅書は婆羅門教の學術と諺語を集たる者にて繫と
云ふ意味を含蓄せり天竺には昔時芭蕉椰子樹等の葉を編て
書籍を制し初め一葉に一句を記し簡畧に經論を傳へ漸次に
解釋を附し葉を編み添て之を修多羅と云り婆羅門教の勢ひ
衰へ佛教旺盛の時代と成し後も尙は修多羅と云ふ語を用ひ
法蓮華經の如は修多羅の中より抜し者にて修多羅に之を薩

曇分陀利經修多羅 Saddharmapuṇḍarīka Sutra 是れ卽ち今の妙法蓮華經と在り現に我國佛刹の本山に於て昔時天竺に用し芭蕉の修多羅を大切に保存する所ろあり偖修多羅書は宗教の儀式と婆羅門師の責任を法律の如く嚴重に定めマックスミュレール Max. Muller 氏の說に依れば紀元前六百年より二百年まで漸次に編續たる証據あり

ウパニサダ Upanishada 書は上靈の性質と人の性質を詳く說き上靈と人の靈魂と關係ある以所を論じ婆羅門師の坐禪の書と云べき者にて紀元前六百年より紀元後千年まで編續たる証據あり偖ウパニサダ Upanishad と云ふ語は靈魂の源あり仙人の解釋に依ばウパニサダは婆羅門と云ふ義を含み婆羅門の外に本体を有する者なく咸な空に歸す可き事を悟る爲の書なり



元來婆羅門教は世界の根元を靈へ神を拜む爲め伏陀を著し拜禮の儀式を定る爲め婆羅門 Brahmans を著し宗教を哲學に變る爲めウパニサダを著し遂に前後矛盾の說を生じ希臘哲學士の輩に做ひ我慢を以て數派に分離し其中ダルサナ Darsana 卽ち眞の鏡と云ふ派が大に勢力を得て支那日本へ渡り佛教改革の後も尙は繼續し現に弘法大師陀羅尼經の如はウパニサダの經論を飜譯して組立たる者なり

天竺の哲學は僧企耶 Sankhya 論瑜伽 yoga 論因明 Nyaya 論毘迦 Vaiseshika 論佛婆弭林婆 Purva-Mimansa 論伏陀多 Vedanta 論の六派に分離し第一僧企耶論は迦比羅 Kapila 仙人第二瑜伽論はパタンザリ Patanjali 仙人第三因明論は喬荅摩 Gautama 仙人第四毘迦論

は迦耶陀 Kanada 仙人第五佛婆弭秣娑論はヂヤミニ Jaimini 仙人第六伏陀多論は伏陀毘耶婆 Vedavyasa 仙人の提出せし者なり此等各派の說が日本へ渡り一時盛大なりしは南都に殘る華嚴宗法相宗の古跡と俱舍論を見て知る可し左に條を別て此等各派の事を說ん

第一條　僧企耶 Sankhya 論派

僧企耶論派の開基は迦比羅仙人にて迦比羅仙人は最と古き人の樣に云どラマヤナ Ramayana 書を見に婆竭羅 Sagara 王の時代に生存せし証據あり而て婆竭羅王は釋迦の弟子たる鉢羅犀那特多 Prasenajit 王の孫なり然ば紀元前四百年代の人なるべし紀元後六百三十年に天竺へ行し支那の行者玄々の日誌を見に其頃カノヂ Canodj 城下に數多の婆羅門師と佛僧が集まり僧



企耶論に就て評議せし事を載たり然ば僧企耶論の天竺に盛大なりしは紀元後七百年代と知る可し

僧企耶 Sankhya と云ふ語は數と云ふ意を含み僧企耶論の主意は能く無形の靈魂と有形の万物を區別し之が成立を悟に在り併し無形の靈魂も有形の万物も婆羅門神の造し者に非ず咸な一の推究憶測すべからざる淵源より自發せる者と云ふ故に僧企耶論の所謂上靈は神に非ず一種奇妙の怪物にて斯る無神の哲學は天竺人民の性質に適ず否な世界万民の性質に適ぜ第一道理に適ざる者なり天竺の原書研究に高名なる學士プールノフ Burnouf 師が天竺佛法の文章に於てプラジユナパラミタ Pradjnaparamita 則ち般若波羅密多マジヤミカ即中論派の中に十二目祿の哲學の趣意を調べ佛法の眞の哲學は此サ

ンキヤ論に似たる事ありと云ひ又た佛法の哲學は斯の如く婆羅門教の理論に立戻といふ事を頻に述たり

第二條　瑜伽 Yoga 論派

瑜迦と云ふ語は合と云ふ意を含み瑜迦論の主意は坐禪の奇特に依り人の靈が神の靈に合と云に在る天竺には昔時よりヨーギと稱する仙人數多ありて坐禪の業を修め來しが紀元前二百年代にパタンヂヤリ Patanjali と云ふ仙人が出て瑜迦論を擴張したるなり

瑜迦論は万物の上に一主宰者を置て之を上靈と稱し万物は皆な上靈より造られ上靈は日輪と人心の中に留り人心の中に留る者は坐禪の修業に依て日輪の中に留る者と合ひ忽ち智惠を增加す故に坐禪の修業を爲す時は迷の夢を覺し六根



の穢を拂ひ初て眞の上靈に歸着し万物は皆な盡く一原より出し事を明に悟と敎ふ

天竺に於て瑜迦論に順ふ者は上靈の歸着を目的に坐禪の規則を守り五体六根を鎭め呼吹も自由に爲ず一心不亂に婆羅門の名を唱へ專ら修業を爲す我日本國にも淨土宗祖にて豪傑なる叡山の圓光大師は之が流を汲み坐禪の修業を以て通力を求め禪定三昧の讃愼べき嚴重なる誡規を立たり

支那の歷史を見に佛教の勢力を得し時代に瑜伽密教が盛に行れ佛僧の口傳に依ば初め金剛薩埵 Vajrasattwa と云ふ仙人が金剛薩埵を傳へ紀元後七百二十年に至り金剛智 Vajramati と云ふ仙人が金剛の智惠を携へ來り不空大師に授く不空大師は之を受て七十二卷の經論を著し數多の徒弟に敎へ數多の徒弟

は頻に陀羅尼經を唱へて通力を求め遂に瑜迦と云ふ秘密の唱を爲し靈魂の上靈に合ふ事を願ひ毎年七月十五日を以て諸禮の儀式を定む是れ盂蘭盆會の起原なり日本桓武天皇の御宇延暦廿三年に僧の空海が支那へ渡り瑜伽師迦論派に高名の徒弟と成り瑜伽密教の奥意を極め歸朝の後は大に曼陀羅經を擴張し遂に十住心論を著し弘法大師の尊稱を得て眞言宗の基を開けり

第三條　因明、論派

因明、Kyaya 論派は喬荅摩（Gautama と云ふ仙人より起れる者にて富蘭那 Purana 書を見に喬荅那は紀元前四百年代に當り雪山 Himalaya 山の麓に産たる者なり因明と云ふ語は正と云ふ意を含み因明、論の主意は眞理を說て人に正き道を教へ人靈を上靈に歸



着せしむと云に在り

喬荅摩仙人は此論お主張し眞れ悟を以て迷を散す時は物に誘れる事なく仙人の修業を爲す時は因果の賞罰なく輪廻する事なー故に苦は全く逃と云ひ眞を悟る事と仙人の修業を爲す事に就て細に論じ哲學の力を以て六根の研究を爲し四個の証據を揚たり

支那の佛敎に之と相似たる哲學あり歷史を調べ見に紀元前四十年に當り龍樹菩薩の力に由て那伽閼剌樹那 Nagarjuna と云ふ日本僧侶の龍樹と名るもの是れなり此仙人が天竺へ産れシャストラ論 Shastra と云ふ書を著し紀元後六百年代に此書が支那へ渡り菩提達磨の弟子に南岳の慧思禪師と聞し高名の一大知識が之を受て後に天台山の知顗に譲る知顗は過たま日本より

渡來せる傳教大師に一切經を授け傳教大師は之を受て日本へ歸り叡山に於て大に學術の進步を顯し桓武天皇の力を藉て一宗を開く是れ即ち天台宗なり

第四條　鞞崽迦 Vaiseshika 論派

鞞崽迦論派はカナダ Kanada と云ふ仙人より起れる者にて仙人の鞞崽伽多羅 Vaiseshu Sutra と云ふ書に初て見ゆ之は因明、論の中へ理學の説を編入鞞崽迦即ち理學と云ふ名稱を附たる、者にて光を神の性と爲し万物の原質は我等の周圍に充滿せる光にて神が己の思に由り光を以て水を生じ續て森羅萬象を造り遂に一大世界を組立しと述たり。カナダ仙人の時代を調べ見るに確然たる証據なし然ど此仙人の説る理學は天竺に於てウイシヌ拜祀の盛なる時代に初て



起りウイシヌ Vishnu 拜禮の盛なる時代は紀元後六百年代なり故に此仙人は紀元後六百年代の人と推て知る可し此仙人は世界の部分を細に調べ神の性を全能全智全福と云ひ人は有形の万物を棄て神の光に歸る可き者と云り

支那の佛教に之と相似たる論派あり唯識相教と云ひ又た發象種と云ふ歷史を調べ見に初め玄奘が天竺へ渡り那蘭陀院の開陷 Kailhun と云ふ仙人に之を授り其後無着と天親菩薩が支那全國に弘め進で日本へ渡し日本に於て法相宗と唱へ一時盛大なりしが漸次に勢力を失ひ眞言宗に併吞せられ今は漸く洛東の淸水寺に法相宗の名を存せる耳なり

第五條　佛婆彌袾娑論派

佛婆彌袾娑 PurvaMimasa 論派はシヤミニ Jaimini と云ふ仙人より起

れる者にて主意は伏陀の經論に肖り哲學論中第一古代の者と云ど確實なる年代の証據を得ず著書の文法を見に紀元後千二百年代の者と思る然と是も亦た確實なる証據なし

佛婆彌秣娑と云ふ語は推察と云ふ意を含み佛婆彌秣娑論派の所說は推察を以て唱一眞神を悟に在り尤も唯一眞神は已の性を以て諸神と万物を造り諸神と万物は唯一眞神の性を受て終なき者なり世界に開闢あり消滅ある事は人間の行爲如何を以て唯一眞神の定る賞罰に由と云り

此派は神像を神の本体と爲す唯だ拜禮の目的と爲す一神の助を得んと欲する者は伏陀Vedaに就て信仰を堅め神の思惠を悟る可と欲へ神は神の思惠を悟る爲め人に六根を與へ人は六根に依て神の思惠を悟る若十之を悟り得ぬ人は已の誤にて



是より炎を來し之を因果と云ふ回果は人の行爲に由て起り恰も影の像に從ふ如し尤も因果は彼生の時に至り明白なる証據あらはる可と論じ天竺に於て一時盛大なりし

## 第六章　伏陀多Vedanta論派

伏陀多と云ふ語は伏陀の蘊奥に達し既に終と云ふ意を含み伏陀多論派の所說は佛婆彌秣娑Purushimansa論派の所說と同一なれど彼は伏陀を基礎と爲し是はウパニシャUpanishadsを基礎と爲て組立たる者なり

伏陀多論派の說く所は天地万物悉皆上靈と稱する婆羅賀磨Brahma より出し者にて人間と上靈の區別を爲は人間の性質と上靈の性質と同じ性質を有する者なり人間の靈魂は上靈と同じ性質を有す

を知ざる者にて之を迷と云ふ若一迷を拂ふ時は輪廻の罰を

免れ迷を拂ふ術は、法を悟るに在り婆羅賀磨は元來諸德を備へ自ら生活する上靈にて數多の靈を生じ恰も火の火粉を散すが如く世界へ散ー人間の靈魂も上靈より分離して散され生活する者なり分離は卽ち迷にて是より空氣風火水土の五性に關係を來ー五体六根の動作を生ず故に若ー迷を拂ふ時は漸次に發生する諸事を成な虛と悟り原の婆羅賀磨に歸と云に在り

輪廻の割を免れ上靈に歸る爲め散數の蘊奧を悟り身心を愼み坐禪の修行を爲す可しと數へ僧迦藍と云ふ仙人が我佛修多羅 AtmaBuddhaSutra と云ふ書を著し大に天竺國民を奬勵す此書は新約全書に似る所ありて意味深遠なれば世界の學者が之を見て天竺の哲學を綱羅したる者なりと云傳此僧迦藍 Sangharama



仙人の時代を調べ見に紀元後九百年にカリヤナプール Calliangan と云ふ地に生存せる証據あり而て此地は其頃基督の敎が盛なりー

支那に之と相似たる佛敎あり淨土宗と云ふ是は唯一眞神に擬へ阿彌陀佛と云ふ者を立て之を拜し西方極樂淨土に行く事を望む併し阿彌陀佛と云ふ名は天竺の北部に知れ其南部及シヤム Siam ビルマ Birmah アナン Annam 錫蘭 Ceylon 等には知たる者なし

淨土宗は紀元後四百年代支那齊紀の時に當り惠遠法師が初て之を說き尋で善導大師が經論を著し大に勢力を得て支那全國に擴張し其後日本の法然上人が之を學び得て弘め其后親鸞上人が之を變改し遂に淨土眞宗卽一向宗の基を開ける

者なり

極樂淨土の說は支那と天竺北部に一時盛大なりしが是は佛敎の本旨に背き溫槃經に反對せる者なり無量壽經は紀元後二百年代支那漢紀の時に當り鳩摩羅什婆伽人が大切なる原書の阿彌陀修多羅 Amita-Sutra を譯せる者にて之に邦語の解釋を附し淨土眞宗卽一向宗の元祖と成りし者は親鸞上人なり

婆羅門敎の哲學は六派に分れ遂に佛敎を胚胎し來る佛敎の事は別に說を以て暫く惜き婆羅門敎の哲學六派の主意を考へ見に万物の根元と人間の靈魂と神の性質を論じ幸福を求る爲に立し方法は聊か異る所も有れど皆な俄陀 Vedā の時代より繼續せる衆神論にて万物總神論の區域を脫する能はず故に人の靈魂を見て六根の動作が思惟を起す者と爲し遂に奇妙の新說を吐くに至る卽ち靈魂の生を交る輪廻の說にて婆羅門敎は婆羅門師が數百年間經論を秘て人に見す伏陀の如き者は自家の婦女にも見する事なり故に婆羅門 Brāhmana 修多羅 Sutra の類も已れ獨り之を讀み能く神と人間の關係を知り乍ら人を愚に導き異端敎人の區域に在て昔の儀式を守り僞の祀を拜み保祿聖人が誡め給ふ舊羅馬舊希臘の異端敎人と毫も異なる所なし羅馬書第一章十九節と蓋し人の知る可き所の神の事情は人に顯明にして既に神れを人に顯明給へばなり夫れ人の見る事を得ざる神の全能と共神性は造られたる物に依り創世より以來悟得て明に見る可し此故に人々推諉べき樣なし既に神を知り乍は之を神と崇ず亦た謝す

事を爲せ反て其思を亂し其愚なる心は蒙昧なれり自ら知と稱し愚なる者と成り朽壞ざる神の榮光を變て朽壞べき人及禽獸昆蟲の像に似と在り嗚呼眞實に此言の如く凡て眞神を忘る時は自ら迷に溺る者なり

反對論者は毎瑟の五經を伏陀の寫の如く云ど是は大なる誤なり請ふ活眼を開て廣く修多羅婆羅門の類を看よ一も正き說を持ず僅に事帝婆羅門 Satapata Brahmana の中に舊約全書と相似る洪水の說あるのみ然ど此婆羅門書は毎瑟の時代を距る數百年後に出たる者にて古跡の調に依り確然たる証據あり

因明、Nyaya 論伏陀多 Vedanta 論の說を見て印度沈醉の偏頗論者は大に感じ舊希臘國のピタゴール Pythagore 及アリストート Aristote の如き人物は皆な此說に藉り一種の哲學を組織し特にピタ



ゴールは天竺に於て婆羅門師に輪廻托生の說を聞し者と思ひ定む然ど是は大なる誤にて萬國の歷史を繙く時は忽ち迷の夢を覺す可し正確なる事實を調べ見にピタゴールは紀元前六百年代に生存し此頃天竺の哲學論者に一人も此說を知れる者なく反てエヂプト Egypt 波剌斯 Persia の兩國に此說が流行しピタゴールは之をエヂプトに求め婆羅門師は之を波剌斯に求たる者なり又たアリストートの哲學は歷山王が天竺征伐の遠軍を起せし前より在たる者にて天竺の哲學は紀元前三百四十年代に初て起れる者なり

凡そ天竺に於て哲學の基礎と爲る婆羅門 Brahmana 書修多羅 Satra 書ウパニシヤ Upanishads 書の如き類は紀元前八百年代に筆を起し紀元後千二百年代に終れる者にて舊約全書に在る豫言と

新約全書に在る福音を其中に盗載せる証據あり

天竺哲學の創設者迦比羅 Kapila 仙人喬答摩 Gautama 仙人は紀元前四百年代パタンジリ Patanjali 仙人は紀元前二百年代に生存し舊約全書の豫言者ヨナス Jonas 聖人チゼヨ Obed 聖人は紀元前九百年代イザヤス Isaias 聖人ヨエル Joel 聖人は紀元前八百年代ゼレミヤス Jeremias 聖人は紀元前七百年代ダニエル Daniel 聖人は紀元前六百年代に生存せり

曾希臘國の正き歴史を見るに紀元前七百年にアッシリヤ Assyria 國のサルマナザル Shalmanazar 王が天竺を征伐し紀元前六百年にアッシリヤ國のナブコドノゾル Nabuchodonosor 王が再び之を討ち紀元前五百二十年にペルシヤ Persia 國ダリユス王が大軍を以て天竺を征伐しインドス Indus の河岸まで攻入たる事あり特



にナブコドノゾル王は數万の如徳亞人を天竺へ移し今尚其子孫を存す而て基督の福音はトマス Thomas 宗徒が初て傳へ其後徒弟が天竺各地に主教祭司を置て教會を建設し遂に基督教人の一蕃を組織せる事あり

歴史と古跡の証據に依て考へ見に天竺の哲學者流は天竺に住む如徳亞人基督教人に眞正の教理を聞き止を得ず感服して世界の開闢人間の原始靈魂の不滅未來の摸様なんどを曖昧なる己の説に混合したる者なるべし

## 第三章　婆羅門教の律法

天竺の哲學者流は己の推察を以て上靈と人間の關係を論じ阿利耶 Aryas 人の習慣と口傳に據り宗教の律法を定め遂に婆羅門師が一般人民の上位を占め特別の權威を掌握せり

律法の中に肝要と稱し今日まで繼續せる者は天竺の秩序を保證する摩那婆達磨論 Manava-Dharma-Sastra にて之を摩拏律法と云ふ佛一純粹の律法に非ず政治道德宗教哲學神學の諸說を一定一神の性質世界の開闢人間の靈魂未來の事社會の義務刑法民法の撰定裁判官吏の設備なんどを細に記せる者なり神學は凡て伏陀 Veda の說に從ひ僅に異る所は一の婆羅門神 Brahmana 修多羅 Sutra ウパニシヤ Upanishad の三說を取捨し民權の基礎と家內の勤に至て、倫理の五經を秩序せり社會は既に組織せられし天竺國民の種族を分て等級を定め之を宗教の信仰に波及せり故に天竺國民は摩拏律法を神の默示に出し者と思ひ謹で之に從ふ

摩拏律法の作者は卽ち摩拏と稱する者にて之を婆羅門神の



子と云ひ人間の元祖と云ひ世界の主と云ふ併し今の世界は前の世界に代り今の世界の開闢は前の世界の開闢を續たる者にて一開闢毎に必ず一の摩拏に最早六個の摩拏を書載たり佛教にも是と同じ說を爲し成劫と云ひ又た世界の間と云ふ摩拏と云ふ語は一人の名稱に非ず智惠と云ふ意味あり人と云ふ意味あり歐州言語の根本たる拉典語に智惠をメンス Mens と云ひ今の英語に人をマン Man と云ふ舊日耳曼の語に人をマヌス Mannus と云ひ今の日耳曼語に之をメイヌ Mann と云ふ其他歐州の古語に智惠をメンスと云ひ人を摩拏と云し證據は多く在り羅馬の歷史家タシトゥス Tacite 氏の著書チープ Myre 氏のリバヲ Ribhavas 書なんどを見て知べし讖誦伏陀 Rigveda の中にも摩拏

を智惠と云ふ義に用ひ又た人と云ふ義に使へる所あり

然ば摩拏は一人を指て云し者に非ず摩那婆達磨論 Manava Dharma Sastra を組立し數人を指て云へる者にて摩那婆達磨論は數人の組立たる者なり天竺に於て之を摩拏律法と云ど實は行義の經論とも云べき者にて人の行を正し專ら導く事を主と爲り人の行を正し義に導く事を梵語に達磨 Dharma と云ひ佛說に之を法と譯す故に佛法てふ名稱あり

摩拏律法組立の時代を知る爲め婆羅門 Brahmana 修多羅 Sutra ウパニシヤ Upanishad の三書と佛法の古書と摩拏律法書中の誡に就て考へ見に二の證據を認む一は摩拏律法書中の論說が一定せず水火相容ざる者あり是れ一人が同じ時代に組立し者に非ざる證據なり一は摩拏律法書中の論說は婆羅門修多羅ウ



パニシヤの三書と富蘭那と云ふ佛法の古書より拔萃せる者にて是れ摩拏律法を婆羅門修多羅ウパニシヤ富蘭那なんどの書籍より後に組立たる證據なり

婆羅門師は摩拏律法を數万年前に組立し者と云ひ又た大洪水后直に組立し者と云ふ論者も在ど是等は無據の妄說にて採に足ず摩拏律法の組立が紀元前五百年代に初り紀元後七百年代に終し事は數多の博士が證據を揚て斷言せり

傳士ジョヌス Jones 氏は摩拏律法の組立を紀元前八百年代と云ひ有名の學士ルワズロール Loiseleur 氏はジョヌ氏の說を駁し決して斯る古き者に非と云ひプルヌフ Burnouf 氏は釋迦の前と云ひウンテール Hunter 氏は紀元後五百年と云ふ何も每瑟の時代に達る事を得ず却て數百年後に在る證跡顯然たり

第一卷に於て摩拏律法と毎惡律法の相似る箇條を列記し摩拏律法は毎惡律法の摸擬なりと痛論したり故に摩拏律法の組立時代を確る事の必要を感じ左に三條の証據を掲ぐ卽ち一は摩拏律法書中に在る地誌歷史の事二は書中に在る經論を引れ事三は經論變更の事なり

第一條　摩拏律法書中の地誌歷史

第一摩拏律法書第二卷十七節より廿四節まで記す所を見に雲山 Himalaya 山尾底牙 Vindhiya 山の間に在る中天竺は之を阿利耶 Ariyas 國と云ひ東海岸より西海岸まで之を阿利耶伐多 Ariyavarta 國と云ふ是は皆な阿利耶人の住む所と在り然れば此書を著す時は既に阿利耶人が各地に住居せし者なり

阿利耶人が中天竺東海岸西海岸まで繁殖せし時代は古跡の



証據に山て紀元前三百年より古からざる事を知る故に摩拏律法書編纂の初も紀元前三百年より古からずと知べし

第二摩拏律法書第十卷四十三節に闍摩耶人 Yavanas 支那 Tchinas 人が婆羅門師の掟を破り刹帝利 Kshatriyas と云ふ武人の族を放逐せられ首陀羅 Sudras と云ふ賤人の族に入一事を戒たり闍摩那人と云は希臘人にて支那人と云は達靼及支那人なり

闍摩那人が天竺へ初て移し時代は紀元前三百二十年に歷山王が天竺を征伐せし後にて今俗パンヂブ Panjab 府信度 Sindh 府の各所に子孫を殘し一時は本國希臘の學術技藝を利用し國を信度 Indus の河岸に建て名を遠近に轟せし事あり是は紀元前二百年の頃なり又支那と云ふ名を支那國民に負せし事は秦紀の時代てに紀元前二百年より古からず此等の事實は他

の正き歴史に確乎たる証據あり

婆羅門教の歴史を調べ見るに阿利耶人が他の蕃人を自己の社會に編入し刹帝利と云ふ武人の族に加へし年代は紀元前五百年にて逐放せし年代は紀元後七百年なり然ば摩拏律法書第十巻の編纂は紀元後七百年の後と知る可し

第三摩拏律法書中に伏陀 Veda を讀む可し盎賊 Angus を讀む可しウパニシャ Upanishad を讀む可し伏陀多 Vedanta の第二巻八百六十節を讀む可し富蘭那 Purana の第三巻二百卅二節を讀む可し弭秣賀 Mimasa の第十二巻百九節を讀む可し抔と命ずる所あり盎賊は佛法に阿伽摩經と稱する者にて紀元後千二百年に著しウパニシャ伏陀多は紀元前に筆を初と雖も紀元後千二百年に終り富蘭那は紀元後八百年に出たる者なり之に依て摩



拏律法書編纂時代の晩近に在る事を知る可し

第三條　摩拏律法書中の經論

第一摩拏律法書第四巻百卅節に婆羅門師は故意に聖像の前を通行すべからずと在り是れ此頃最早婆羅門教に偶像を拜せし証據なり昔時伏陀時代には偶像なし偶像を拜する事は富蘭那 Purana に先祖の像を貴ぶ可と在に初り紀元前二百年代なり是を以て此書編纂時代の古からざる事を知る可し

第二綿密に調査を遂る時は摩拏律法書中に在る經論の主眼は婆羅門神に關する事にて他は伏陀 Veda ウパニシャ Upanishad 修多羅 Sutra の書中より秡萃せし畧說なり中には彼瑜伽 Yoga 論弭秣賀論を引用して組立たる箇條あり即ち上靈も万物も皆な自然に出て初なく終なき者と云ふ是なり

摩拏律法書第一卷五節に世界は初め暗黒にて万物なく大主あり世界の原素を生じ自ら出て暗黒を散し万物を造と在り茲に大主と在は婆羅吸摩 Brahm と云ふ神にて形なき者なり已の思に由て水を生じ一の種を置く種は金の如き光ある卵にて是より産れ出し者を婆羅門神と云ふ是れ摩拏律法書中に在る經論の主眼にて現今婆羅門教の一大基礎なり

摩拏律法書中の經論は一の大主を置き婆羅門神を出と雖も之を万物の原始と定め万物は之より出たる者と教へ總神論區域を脱する能はず遂に万物は悉く上靈に既と云り此等の說は皆瑜伽論弭秣賀 Mimasa 論より引たる者にて自ら紀元後九百年代の編纂に係る証據を顯はす所なり

第三條　摩拏律法書中の經論變更



第一摩拏律法書中の經論に輪廻托生の事を說く是は此書が古代の者に非ざる証據にて輪廻托生の事はウパニシヤ修多羅の両書より秡粹せる者なり

摩拏律法書第十二卷三節より一節まで通覽するに思言行の三が善惡に偏る時は必ず善惡の結果を見る卽ち行を以て罪を犯す者は死後植物に變じ言を以て罪を犯す者は禽獸虫魚に變じ思を以て罪を犯す者は下等の動物に變と在り

第二段に至て最早佛法の經論に倣ひ佛法の書籍より秡粹して靈魂の性質を述べ上靈の關係を說き再び此世へ産れ來る爲め地獄極樂に渡る事を調べ第十二卷廿三節に人は分別を以て因果輪廻の善惡より來れる事を悟り善に向て進む可と敎へ靈魂に自由と情と迷の在る事を示し續て輪廻すべ死身

分と姿の目祿を揚たり

第三段は富爾那 Purana の說に從ひ婆羅門師が天竺に於て己の權力を定し時代の証據を顯し第十二卷五十三節より六十七節まで目祿を揭げ罪人は地獄へ陷て苦き責を受け其後輪廻の規則に依て目祿の通り復生す蓋し婆羅門師を殺し者は獅子犬駱駝の類に生れ酒を飲し婆羅門師は蚓蜒其外虫類に生れ何は角に生れ彼は是に生る抔と抱腹絕倒に堪ざる事あり斯の如く摩拏律法書中の經論は時勢に連て變更し伏陀 Veda の主意と反對の所も多し是は全く婆羅門敎が佛敎の勢力に壓られし後に編たる故にて婆羅門敎が佛敎の勢力に壓られし時代は紀元前三百年の頃なり

第二現今婆羅門師は肉食を禁ず然ど伏陀に之を禁ずる事な



し却て阿利耶 Ariyas 人が供物の牛肉を以て貧客を饗應せし事あり又摩拏律法書第三卷百廿二節に死人の爲めソウダと名る供物を捧る時は律法に定め在る肉を以て饗應す可と在り二百六十三節に犧牲の種類に依て死人が快樂を受る長短を示し目祿に魚肉は二箇月猛獸の肉は三箇月羊の肉は四箇月鳥の肉は五箇月兎と龜の肉は十二箇月と在り第五卷に於て羅門師の食する事を許されたる肉と許されざる肉を定め許されたる肉は日毎に食するも罪ならず食せらる可き動物を造り之を食す可き動物をも造られたりとあり

斯の如く婆羅門師に肉を食する許あれど食せざる者を貴び摩拏律法書第五卷四十六節に動物の生命を害せざる者は終なき樂を得べし肉を食する爲に獸を殺す者は極樂の道を塞

ぐ者なりと云ひ五十一節に獸を殺し之を切り之を賣り之を買ひ之を料理し之を給事し之を食ふ者は暗殺に關する者なりと云ふ婆羅門師の斯る說を爲は皆な佛法より引用せし者に摩拏律法書中に斯る說の記し在は摩拏律法書を佛敎設立の後に編纂せし證據なり

以上提出せる數端の證據に由て摩拏律法書編纂時代の古からざる事を知る可し天竺の古跡を審査せし數多の學者は皆な摩拏律法書編纂時代に就て說を爲し是は婆羅門師の云る如く古き者に非ず確乎たる證據なしと雖も伏陀Veda當蘭那Purana說を採り佛法の哲學を使用し在る所を見ば何程往昔に進ましむるも紀元前五百年より前に及す事を得ずと云り摩拏律法書の編纂を古代に在と云ふ學者は書中に世界の初



を說き婆羅賀磨Brahmaを造者と定め上靈と爲し都て伏陀の古き說を有する者にて紀元前千五百年より後の者に非ずと主張す併し此言の非なるは第一章に於て反覆丁寧に證據を揚し如く第一古き讃誦伏陀RigVedaが紀元前五百年代に筆を初め紀元後一千百年代に終り特に婆羅賀磨と云ふ名は伏陀の中に一も見ざるに依て知る可し

婆羅賀磨と云ふ名は紀元前七百年代より紀元後千二百年代まで哲學の論書に見ゆ而て之を神と定め婆羅門神と崇る事は摩拏律法書中に初て見る所なり摩拏律法書中の經論に依てウイスヌVishnu神黑神を拜む事は紀元前三百年代に初り之を止し事は紀元後七百年代佛敎の亡たる時なり

正確なる理論を以て數多の學者は摩拏律法の組立を紀元前

五百年代に初り紀元後七百年代に終る者と爲す然ば毎瑟律法は古く摩拏律法は新し故に毎瑟律法と摩拏律法の相似る箇條に就て摩拏律法は毎瑟律法の摸擬なる事を知べし

古代の歴史を調べ見に紀元前七百十九年アッシリヤ Assyria 國の豪傑サルマナザル Salmanasar 王が如德亞國を征伐し同六百年ナブコドノゾル Nabuchodonozor 王が如德亞國の人民を己が領地の諸國へ移す此時前章の終に述ー如く天竺へも移せり天竺へ移されたる如德亞人は既に毎瑟の五經を初めダビド David の聖歌ジョブ Job 書判事書賢知書イザヤ Isaias エレミヤス Jeremia の預言なんどを記憶ー天竺の人は之を聞て正き說を知たる者なり

西天竺コシヌ Cochin 領に昔時黑如德亞人が毎瑟の五經を認ー



長さ五十尺の獸皮の卷物あり又アフガニスタン Afghanistan 國の如德亞人が支那の奥に之を同じ卷物に認し毎瑟の五經を遺ー今尙保存す是筈の古物に依て昔時毎瑟の五經が世界に弘り何國の人も之を知の便ありし事を悟る可ー

如何に無宗教の哲學者が無証據の妄說を以て基督教會の基礎たる毎瑟の五經を破らんと欲するも得べからず舊約全書に在る如く聖人は自ら惡說を打消なり

## 第四章　種族の權限

抑も婆羅門 Brahma 教徒が摩拏律法書を著述せー事に就て重大れ關係あるは種族の權限を定むる爲なり阿利耶 Ariyas 人中にもこの制規を注入して自ら衆に卓越ーたる最大貴重の地位を占たり依て今に尙この律法は天竺に存留して公道を過り

たる社會を組織なせり

數多なる普通の學士輩は常にこの種族隔離の事實を論じ
べて屢〻律法書より此區別を制定せしものなりと思慮すと
雖も之は皆々謬りたる說にして天竺の人民はその始より既
に此區別ありしなり其は太初天竺の人民といふは種々の人
類が相集合して成立たるものなればその時より自然に種族
の區別ありて夫を後世に存在せしものなり然るを屢〻 Manu
律法の著者がこれを奇貨とし自己の利益を謀るためにこの
習慣を利用し尙詳細に說明したるまでの事なり
斯この種族の制定されし時は釋迦出世の前と思はれるなり
其を如何となれば一度この種族の隔離より頻發したる天竺
の同權同氣を再び回復させんと欲し豪傑なる改革者が衆人



の感服すべき目的を呈出せりといふ說は確乎たるの事にあ
らず現に佛教の出現する前にはやく此種族の區別ありて陶
利耶人の祉會の時に既に種族の權限を定むる事に就て數多
の反對論者蜂起して卽ち刹帝利 Kshatriyas 族人(士族)および毘舍
多族人(商人)ならびに婆羅賀磨師の幾部分もこの種族論に攻
撃せり然るにこの沸騰せし種々の論派は大に佛教擴張に便
宜を與へたり夫より後時勢の變遷に從ひて一大改革を生
じこれが爲に再び往古の種族論に歸したるを以て一旦盛大
を極めたりし佛教も漸次に衰微して遂にはその教法の天竺
の地に跡を絕の觀を呈せり而して此時代に當り屢〻律法
書を上梓せりこれ卽ち詳細なる律法の企てにして國の習慣
を充分に染浸させる爲に種族の區別を定めたるなりこれら

は前章の証據を重ねて見れば摩拏律法書は佛教以後に出來せしと分明なり

此種族區分の研究をなす前に當りて第二卷に於て記述したる地理學の調査上に就て左に聊かその概畧を誌ざるを得ざるとあり

却說阿利耶 Ariyas 人の天竺國に來住する前已に天竺國には藩を分ちたる各種の土人が多く住居せり依て今日におよぶまでも猶各種の習慣ならびに宗教、言語、名稱等を遺傳して自からその域を異にし一目にして判然たるを分つに至れり此等が即ち種族の區分ある原因となりたる者にてこれを梵語に生 Djati といふ(即ち蕃および血統並びに家族といふ義なり然して此種族の區分は舊阿利耶人および夫と同時代なる歐州



諸國に於ても嘗て見認ざる處なりきまた其時代にありては仮令數家に分離すると雖も同等の權利を維持して上下隔なく相互ひに婚姻し家内の家長はその家の祭司の如くなりしが漸次に人民の繁殖するにおよびて段々と宗教の儀式も綿密になり規則を定めて其務に與かる者を格別の家に置きになりたり之婆羅賀磨師の因て起りし處にして第二卷に述し如く婆羅賀磨師とは拜禮祈禱儀式等に關與する者といふ意なり

その中に豪勇なる者は武士となりて或ひは王と稱し大將と稱へ漸次にその位を子孫に讓りて世々これを襲ひたるとは我國封建代の大名の如く現今の士族の如くなりきこれを刹帝利 Kshatriya 族と稱せり

毘舍多 Vaissyas 族も斯の如くなりきこの梵字でウイス Vis とは平民といふ意にして土地を耕耘賣買をなすものゝ稱にしてこれ毘舍多族の原由なり

斯種族の名稱は古代より相別るゝと雖も中古まではその名稱を異にせしのみにして平常相互ひの交際上に至りては隻方鼻賤ることをなさず結婚等をもなして銘々にその分を守りて自ら三色人 Trivarnakas 人と稱せりこれ即ち婆羅賀磨師刹帝利 Kshatryas 人毘舍多 Vaissyas 人の三種族が合併せしといふ意なり

斯て追々に人民の繁殖するに從ひて婆羅賀磨師は深く茲に考案を下し目下の如く何れの蕃人熟れの種族と區分なしに同權を持し相互ひに結婚來往せば折角今日まで我々婆羅賀



磨師の占得たる特殊の地位を失なふべき困難の時機なきを保し難しと悟りたるがゆゑに種々の事を工夫し遂にその地位を保ことをなしたり

刹帝利人は戰爭を好み其氣質兇暴にして常に諸蕃人と交際せしため遂にその人類および身分を大いに害せらるゝに至りたり而して梵語にヴアルナト Varna と(色)を以て種族の區別を定めたり故に白人(婆羅賀磨師)赤人(刹帝利人)黄民(毘舍多人)黑人(輸達羅職人)なり

偖この變化せる時に當りて輸達羅 Sudra 人即ち數多の職人がこの種族中に加入することになりたり然してこの輸達羅人の起原といふは戰爭のために敗北して虜となりたる大勢の土人にして摩拏 Manu 律法第八卷四百十五節に書載たりこれは

原書にて奴隷と稱したる人類のことなり
斯て自ら我藩を維持する爲に各種の土蕃人と隔離をなし種族の區別をたて婆羅賀磨師は自ら第一等の地位を占剎帝利人に第二等の位を與へ毘舍多人に第三等の地位を與へたるがその時に當りて農商人たる毘舍多族等には最下等に置れて賤めらるゝことを屑よしとせず種々巧に工夫を運らし第二等の地位たる剎帝利族に加入せんことを求めしがため漸次に消滅するに至りて輸達羅人がこれに代り第三等の地位を襲ひたりき

然してたま剎帝利人も婆羅賀磨師のために身賤らるゝことを厭ひて大いに婆羅賀磨師に逆ひ同權たらんことを主張たるがやゑこの紛議は遂に數年の久きに亘りて解ず後にはこれら



の爭ひより戰端を開くことになりたり這は伏陀書を讀は自から其事實明瞭すべし然るに婆羅賀磨師の智術は大いに剎帝利人に勝れたるうへ伏陀書の力および祈禱秘密經論の力をかりて大いに人民を恐怖せしめ遂にその人望を万民の上に求むることを得たるなり而して伏陀書方便の說を讀ば婆羅輸藍摩 ParasuRama 王は元剎帝利族人中に産れしものなるも叛反して一時婆羅賀磨師の血統となり一回三度の大戰爭に大に剎帝利族人を散亂せしめたる者なりといへり

兎に角婆羅賀磨師の勢力は各種族の上にありて且強く且大なりしことは歷史上に明らかにして婆羅門書およびウパニシヤ Upanishad 書の時代に當りては殊に勝れたる勢力を有したり摩拏律法書を編纂するに際し其位のことに就て細密なる法

律を書載たる今この規則の概略を簡單に左に述ん

摩拏律法第一卷三十一節を讀に實に抱腹絶倒するも尙餘りあるの說を載たりその說にいふ婆羅賀磨師を生み次に刹帝利 Kshatriya 人をその臍より生み次に毘舍多 Sudra 人をその脚より生めりと之卽ち天竺の狸諺となり來たりて八をその脚より生み最後に當り輸達羅 Vaisya 人をかの四種族の起りし根原の聖言なりと尊べりその至愚なる事實の如し

同書第一卷八十節には各種族の課務を明記して曰く婆羅賀磨師は聖書を研究しこれを他人に敎へ祈禱祭禮等の儀式を行ふべし刹帝利人は人民を守護し慈悲の所作を爲ー聖書を調べて情慾を耽る事なかるべし毘舍多人は農商業を勉勵し以て施捨を致し傍ら聖書を研究すべし尙又輸達羅人は他の種族人を奉行すべし云々

又特別なる說を立て卽ち婆羅賀磨師の德義および他の種族に起越したる持權を定めたり同書第一卷九十三節より段々と各節を通覽するに婆羅賀磨師は貴き神の部分より生れ出し者なれば凡ての受造物の主たるなり故に婆羅賀磨師の誕生は神の義の自然に發する處なるを以て婆羅賀磨師は義を行ふ爲に生れたり依て今世にて第一等の位を求め萬物の上主と稱へられ今世にて使用する萬有物は悉皆く婆羅賀磨師の所屬なり云々と縷述したりき

其第七卷三十二節に曰く國王と雖も婆羅賀磨師の面前を通過するときは必ず禮すべし、、、、、時の如何を問ず彼等を

敬すべし、、、、婆羅賀磨師に供物を備ふべし、、、、云々と規定せりまた第九巻三百十三節に曰く國王は婆羅賀磨師に逆ふことなかるべし若婆羅賀磨師の怨りに觸るときは假令兵隊武器を使用するも雖も彼等の祈禱秘密の行ひのために皆悉々く破らるゝべしとあり夫斯の如くに婆羅賀磨師は勢力を占る者にして恰も我國に於て徒時佛徒が勢力を極し時代即ち聖武天皇の御宇に全國の者をして佛徒の勢力に從はしむるために勅詔を下し給ひたるとありしとその趣ひき粗相似たるなり

斯の如く婆羅賀磨師は無要の徒と貴き位および其他種々の思惠に俗せるかはりにまた自ら頑固たる規則のために壓せられたり其は學文、坐禪、儀式、精進、謹愼等の修行を堅く守りて其位は自己一生の正しき行ひを以て之を高め且勉強して卓絶たる智惠を發揚して之を顯すべーとて第二巻大十九節には於ては頑固たる說を以て其日々々の課業を定め祭司の火を默するとより朝、晝、夜の祈禱ならびに聖書を讀で秘密の論理を調べその他衣服の着用および寢食等の事に至るまで詳細に規則を設け最嚴重にこれを定められたり



然して婆羅賀磨師は三十六年の間は書生の身分となりて業を修め然る後に大戸主となりて妻を娶ることを許さるゝなり尤も此務方は嚴重なるとにしてその法則を記すために同書三巻を塗飾せり斯てこの婆羅賀磨師は子を産せばその子を敎育しその敎育の成就せし日より父の婆羅賀磨師は古きを去りて原野に到り坐禪を爲し野菜のみを食物とし遂に乞食

の境界となるなり

斯る修業を企て爲すがゆゑに婆羅賀磨師は現今に到るまでも上は國王より下は穢多に到るまで天竺の國民に無限の歷制を施こし終には婆羅賀磨師の文典、宗教、律法および習慣をも漸次に一般の人氏に波及して蕃人開化の大原の手本となりたるとなり

故に今この婆羅賀磨師の修業を知らしめんがために現今天竺の有樣をベランジマ Berengier 師の旅行記中よりして其詳細なる實說を引用し序を追てこれを左に開陳すべし

偖婆羅賀磨師は其血統を貴んで自己の身を國王の右におき婆羅賀磨師のみにそ學問および位ならびに萬の寶物且すべての樂みを得る者なりと思へりこれ卽ちその血統を貴ぶの



故にしてその身は勉勵せざるも能その貴き地位を得るなりとて頻りに他人に誇りて自から我慢の心を增長せり

抑も婆賀羅磨師はその小兒の時に當り大儀式と稱へて三ッの糸を以て捻たる紐を授かるとありこれその徽章にして常に左の肩より右の腰間に垂たりその紐は九條を以て一本としたる糸三個を捻合せたるものにして此紐を作るには摩拏律法の規則に從がひ婆羅賀磨師自から吾手を以て綿を摘み糸を製し紐とするものにて聊かも他人の穢れたる手を紐に觸ることを許さず而してその小兒の五歲より九歲におよぶまでは方便度 Oupayana といふ智惠を授かる大儀式を行ひて後始めて其小兒に伏陀書を讀ことを許すなり以上述るが如く種々の儀式によりて婆羅賀磨種族の比類なき諸德を授かるなりと

いふ

其後成人せしうへにて婆羅門賀磨師は大儀式を行ひて妻を娶るなり而してその大半は農業を營み隱逸に生活を計る輩多し中には世俗の交際を避て人望を得んがためにその親族を伴ひ身を山林の中に退き修業を爲すものありこれをヴァナプラスタ Vanaprasta（森仙人）と稱すまたサニヤシ Sannyassis（僧侶）と稱ふる者ありこれは妻子を棄て婆羅門賀磨の生涯を修むる者の稱なり

すべて之等の事を精密に探究すれば天竺にて斯のごとく世歷を避て修業することはその原始を亞細亞の西部ならびにエジプト Egypt 國なる天主教修業者の行ひを假裝する者にして



婆羅門賀磨師が自ら猿になりたる者なりこれらは昔時の迷誤にして人民に傳へ來りたるものなり故にテルトリヤン Tertullien 學士は曰く惡魔は上靈の猿猴なりと眞なるかな此言や

つて生したるものにて或婆羅門賀磨師の如きは其身自らいふべからざる程の慘酷なる修業中に陷いれしとあり卽ちルースレ Rousselet 氏の印度記行を試にその書中に曰く途中に於て慘酷なる修業をなしたる婆羅門賀磨師十九名に會せしとあり各々いづれもその守處を異にすると雖も各自共に人の尊敬を得るの術を考究するに外ならず或ひは巾を以て己の口を掩ひ虫を呑ざるの準備をなし又は其信仰によりて種々の高歌

を養育また或は身を塚穴の中に臥て其穴中より出ざる者あり尚また毎日二時間宛は左りの足にて直立し天を仰きて立者ありその他種々の奇河をなすこと實に驚くべき事なり就中一人の婆羅賀磨師の如きは二年間の長の間その手を頭上にて合掌し且つ危坐して少しも動くことなく自らその身を責めたり斯の如く合掌なすがために飲食すること能はざるを以てその婆羅賀磨師の家族が入代り立代りて之に食物を喰しむることなり實に斯の如き窮屈なる責を自ら甘じて決心し一生涯これを行ふことは迚も通常人間の爲し得べからざる處にして驚愕に堪ざるなりと記せり

夫斯の如く婆羅賀磨師が自ら非常の修業を爲て百般の情慾を禁ずる者の如く見ゆるもこれその外想のみ虚飾する狡猾



欺妄の瞞着手段の外ならずその内實決して然るにあらず幷はペリン Perrin 氏の印度記行に就てその証據は明白なりペリン氏の嘗てボンチセリ Pondichery 府に滯在中一人のヂヨギ Djogi (山伏)が寢棺に入て多くの徒弟に誘はれて此府に來れることあり多くの弟子は棺中にある山伏即ちその師匠を賞讃して曰く吾師は前々より空氣中に呼吸せずまた光熱を藉らず飲食を絶ること久しと雖ども神色自若として更に少しも變せざるは大聖人にあらざれば爭で斯の如きことを得ん汝諸人はやく來りてこの大聖人に各自の供福とその救護を願ふべしこの聖人は印度の諸神中にて殊に秀でたる神にして獸中なる牛その他の者に卓越すること萬々なりとて頻りに其德を頌ずるにその到る處皆々この弟子の巧言に欺むかれ彼婆羅賀磨師

を尊敬せざるはあらざりしに此ポンチセリ府の奉行即ち知事なる者は聊か卓見のある者にて有しかば彼等の言を容易に信せずしてその詐欺たるを知りこれを止むるの考案をなし數多の番兵を遣はしかの寢棺の傍にをらしめ晝夜これを戍しめ他人の棺に近き寄ることを禁じたるに果して棺中に在るあの婆羅賀磨 Brahma 師は此番兵のために大いに窮し危急の場合に迫りたれど自ら充分に勇氣を厳舞し万一の僥倖を待居たれど遂に饑餓のためにこれを堪忍びがたくなりて内より鍵を以て小き窓を開きいと哀むべき虫の如き聲を發し我に食を與へ給へと乞しを以て乍ちにその詐欺の術なることの露顯して奉行は直ちにこれに食を與へ而てその連累等と共に大いに之を鞭韃囚く將來を戒しめて府外へ去れを放



逐したりと

然りと雖も行者は皆々斯の如き輩にして印度人を迷はす詐欺手段のみなりとも云べからざることありフアキール Fakkirs（行の仙人）と稱する婆羅賀磨師の如きは頑固なる我慢の固結して唯飽までも人々に尊敬せられんことを求めて自ら其身を責ることに到りては實に妖魔の幻術と雖もいかで之に及ぶまじと思ふ程に其身を責ることにてその業は各々異にして一定せずと雖も或ひは錬鐵を以て造りし鎗の上にその身を俯すことあり尤もその鎗は肉身を貫かざるやうに鈍く造りたれどもまた身を苦しませる爲に聊か尖らせたるものなり又或ひは藁の中にその長四五分計なる針を多く包みたき二三丈も高き處よりその藁のうへに飛下ることをなすされども死せざ

る穢に造りて全身に傷つけて其身を責るとなりまた或ひは裸躰とありて酷暑のをり日中にその身を炙りこれが周圍に火を放ちその中に坐するとなりされども火は此人を焼殺さゞるやうに薪を少し隔て、積おくと雖もその炎熱の苦しみに至りては恰かも釜中に在が如く而してその薪の焼盡るまでは行者は中央に跌坐して少しも動くことなく却て時々いや悦ばしき顔色を呈すなりと又或は数多の証據人の説によりて或る者は十五ケ年の永き間吾臂を伸して掌を握りをりしかば臂の神經は漸次に固まりて骨の如くなり毫も屈することは能はざるやうになり如之指の爪の追々長く延るに至り肉にいり遂に手の甲を貫き徹りたるがその痕へ漸次に肉を生ー相固まり爪の徹りたる痕を消し手の甲より天然に爪の生ーたるもの、如に見えたりとベリー氏の記行中に記したり



實に此記行中には甚だ奇怪にして信じがたき説數多ありと雖ども皆これ實事にして毫も文飾なきの説なり然るに斯る無智の迷ひは獨り印度のみにあらず現に我日本國にても昔時は種々の業をなして其身を責る行ひの傳へたりと見えかの京都清水寺の舞臺より身を投ることを願ひて飛下者ありしとは既に世人の知る處なるが當幕府に於てこれを嚴禁し且その暴風を妨ぐるため垣を設て下に樹木を植付たるが今尚これを存ずされば此事は天竺の婆羅賀磨師の業を移したる者と察せらるゝなり斯の如く婆羅賀磨師は其種族の位地に迷い種々酷なる計とを設けその勝れたる種族權を私有せ

し者なりと知るべー

現今に田舍に於ては摩拏 Manu 律法書の要用たる條目を墨守すと雖も今代の婆羅賀磨師は行者および坐禪を減じ伏陀 Veda 書ならびに梵字の勉強に耽ることなく追々英語または西洋の學文をなし如何なる工夫をなしても肉身の性質と智惠の德とによりて其身の秀たる身分を失はざるやうにせんと力を盡すなり故ゑに天竺に於ては格段に優れたる業および外面の清潔なる勢を守り今代も尙神の如く貴ばれる位を有せるなり

第七卷に於ては刹恒利耶 Kshatriya 族人および國王の細密なる德義ならびに職務の事を書載せその位置を此上もなく尊敬せり第九卷に續きては國を治め之を處斷するの律法を綿密



に傳へたり

また第九卷の終に於ては毘舍多 Vaissya 族人および輸達羅 Sudra 族人の務めを定めその第三百廿六節に曰く受造物の主は戰を造りし後毘舍多人に彼等を預けり而して人間は悉皆婆羅賀磨師および刹恒利耶人の守護に置と定め給へり故に毘舍多人は其農業および其職を安心に務むべー云々と述たりまた輸達羅人等は聖書を悟りたる婆羅賀磨師の命は愼んで從ふべしこれ格別に彼等の務べきことなりとて其三百三十四節に於て最も嚴しく戒しめる處なり

昔時は斯く四種族に定まりたりと雖も諸藩人の交際上にはまた別なる人類の區別ある如く同種族中にても相割據して交際せざることは實に甚だしき種族となりたるなり尙且婆羅

賀麿師中に於ても其族は十類に分離し千種に相別れて相互ひに結婚せざる程の別々の血統とはなれるなり況んや其他の種族に於てをや一々これを擧て數ふべからず

斯の如き實況なれはその種族を定めしものは婆羅賀麿師が其の基礎にあらずして婆羅賀麿師の以前よりして判然と區別のたちしものたるは明らかなるべし

婆羅賀麿師は阿利耶人の中に其習慣を注入して自身等の血統の純粹にして且卓越したるを得るの計畫をなせりてれ尤も我慢と慾心より致したることにてまた土人等の野蠻中に親へらるゝことを厭ひて之を免かれんがために自ら天竺の師匠となり文學言語の表準なりたるものにして啻て之を云ば天竺の開化文章律法等は皆この婆羅賀麿師に據て成た



る處にして昔時はこれがために名を高くし繁昌を極めたるなり其後は漸次にその律法書のあるが爲に右の如き壓制に陷りたりと雖もまた婆羅賀麿師の勝れたる心得には感服すべきとなり

斯の如き種族の區別に就て不服なりとの論を主張せし事は實に甚き猛烈なりし之は實に然らざるを得ざるとにして抑〻高民が天賦の同權を廢し人德中に於ては最も第一に尊貴自由を壓制し之を束縛する如き種々の隔をなし其交際を拒み社會に必要なる愛國心を喪失しむるに至りたればなり今天竺人の愛國心を喪失せしといふ証據を擧んにかの廣大なる國土と人民を以て國を奪ふ外敵に對するとき能はず現に天竺の人口は二億五千万の多きに達するにも拘らず僅々たる數

万人の外敎のために事なく支配さるゝを見ても知るべきなるべし

茲に天竺の今時代の有樣を甘受すべきために天竺に於て細密なる種族の調査をなせーベランシュ Berengler 師の日記を引て左に其事を記述すべし

天竺四種族の大別は既に前々より之を開陳せし如く婆羅賀麿師の務は僧侶にして刹恒利耶 Kshatriya 人は士族の身分なり毘舍多 Vaissya 人は商家にてスダラ人は職工なり然りと雖も尙その種族中には夥しき數種の派を生じ生計上および職業上等によりて自から分離をなし相互ひの交際も絕て同種族中に在ながらも始ど懸隔したる兩の種族の如し今これを約言するときは野蠻にして民權を知らざることは他の如何なる



人種と雖も此印度人に比すべき者は非ざるべー斯自放自棄の種族の隔てをなすが故に社會の交際上より止を得ず懸隔を爲さゞるを得ざる場合に立至るなり

此隔てにつき社會の道德上及び宗敎上より視るに其下等種族は上等種族のために壓制を蒙ることは實に甚だーきことにしてこの習慣のあるがゆゑに該國人は他國人より愚と稱へられ輕蔑嘲笑を招くの損害を蒙むることになれり然して基督敎徒中にも下等人および薄弱なる民權家ならびに位階を持者ありと雖も社會の交際上お就ては至極平穩にして區別ありてまた區別なきものゝ如し

今フオンタニユ Fontanier 師の印度記行中にボンベ Bombay 府サルセット Salsette 島の森林中にプリヤ Pouliah 人類の住せし事實を

記したるがこれは實に慙愧すべきものなるも名今これを畧記して示さん天竺國に於てはこの蕃人を壓制するとは實に言語に絶したる有樣にて同人種はその村中に住居することを嚴禁するのみならず森林の奥たりと雖も小屋を搆へることを許さず且道路といふともヅ羅、賀磨師に出會ときは刑戮に處せらるゝが故に其出たる時は唯、聲のみを發して放て近づくと能はず若如せざるときは猛獸惡蛇の如く婆羅、賀磨師のために直ちに路傍に於て殺害されるなりフオンタニユ師の言に予曾てボンベの海岸を興に乘て通過せしとき屢々このプリヤ人の恰かも犬の吠るが如き聲を發したるを聞り這は彼等がうの聲を發して予に施興を乞ふものなりき依て森林中なる樹下を望むに黒くして且疲たるプリヤ Pulliyan 人の馳歩くを見たり茲に於て予は彼等を招き寄てその事情を問んと欲したるも彼等は敢て近き來らず依て銅貨を出して彼等に示すに之を興ふべければ受取に來るべしと慶々徹たり然るに予の興を昇をれる興丁どもは穢れたるかの人種を避るために歩を急きて興を昇走りたるもアリヤ人等は大に隔たりながらも倘興を追來りて恰かも猿の如くに叫び踊り予は彼等の偏屈なると且その喧噪なるに屈して止を得ず遠方より銅貨を投與へしに彼等は予の興の遠く隔りて見ざる程になりし時漸くに來りて其錢を拾ひ去れり云々と



又或日海岸に泊たる一村を過んとせしに該村の入口に人大勢相集り何やらん喧ましく噪きをるを見たり依て其事を聞糺すにかのパリヤ人の一人の女が儀に迫りたるを以て自ら

造りたる蓙を携へ波剌斯Parsis人(下等人)は店に到りこれと米穀とを交易せんと思ひ其店を隔ること凡そ二十間餘の處より犬の吠る如くに叫びをりしが二人の波剌斯人が出來りて彼女の携へ來りし蓙と米とを交換せり而ふしてこの交換中は誰ありて該村中を通行する者なし彼女もまたこれ等のために他人を穢さんことを恐れて自然他の人の來る事あれば直ちに逃去んと思ひて裸躰のまゝにて頭部を左右にめぐらし頻りに四方へ眼を配る体に見ゑたりまた商人に於ても一人は人の通行を禁め一人は升に米を盛て自らこれをかのプリヤPouliah人の女に渡てかれが持參の蓙を受取たり元來この商人もパルシ人にて卑賤土民のことなればプリヤ人に近く事は意とせざりきこの時は秋冷の侯にて雨の降し日にて天竺人



のためには最早寒き時侯にてありし然るにかのプリヤ人の女は直ちに已が住居する森林中に逃歸たり尤も彼等の住居といふは大木の穴および柴小屋に比しき恠しの住居にして恰かも猿などの棲屈と同樣の有樣なりと記せり同じ人間社會に在て斯までも懸隔したる種類のある制限を立るとは實に何事ぞや思ふて茲に到ればその憐情また泣涕の至りといふべし

斯の如き種族の堅てあるは一國の團結のためにもまた社會の平穩のためにも大關係を生ずるものにして殆どかの舊エジプトEgypt國の如く人民を上下數等に區分懸隔して同國民をして其團結なさしめざるものといふべし然して論Shastras(天竺の聖書)に於ては此種族の起る基礎を判然と見當る事な

ー然りと雖もサンデルボース Chandra Bose 氏の纂たる書を閲するに必意婆羅賀磨師中に歐州と交際をなし開化の域に進みー學士ありて自己の學識の秀たるを自負せんため一般人民の上に祭司なる職務を置己これを掌握して自國(天竺)の下等人民を社會の奴隷の如に壓制して遂に此種族を組織せしに至れるならんよりて婆羅賀磨師は種族の區別を定めて相互ひに一種族として人民中十分の九に在者へは勉強出精することを禁じ而て彼等に語るに汝等は婆羅賀磨の脚より産れ出ー者なりと云欺むきしものにしてまれ即ち婆羅賀磨師の傲慢より生したる壓制といふべきなり

此種族の調査は細密にして且廣大なるため一々これを明記し難ければ全篇を通過ーてその大畧を記さん下等種族中に



金槌五個の種族ありこれ即ち此道具を使用する飾屋、鉱冶屋、織物屋、大工、左官の五種にして各自この道具を使用ーなから此内の上等職人は自尊してその下等職人と交際することなし然るに英國政治の支配を受におよびてより英國政府は夙にこの惡弊を驅除せんと思ひ種々の手術を施こしたるも全人民等の腦裏に數百年來浸込し習慣なれば尚その勢力強くーて一時に目的を達しその効を奏することは難かりけり

同一の人間に生れ來りて天賦の權は皆悉々く剝奪せられし賤民に最も哀れにも憐れむべき者は波里夜 Pariya 人類にして歐州諸國の人にすら眼下視せらるゝことになりし此波里夜人(日本國の穢多人の如し)は印度人一般より禽獸よりも尚一層下等に被下られて一般の人民はその波里夜に出逢ことをさ

へ不淨なりとし城市はいふに及ばず仮令僻村落といふとも其雜居することを嚴禁し他の種族に交際することは勿論賤しき小家を建ることさへも二町外に非ざればこれを許さず若波里夜人にして婆羅賀磨師其他の上等種族に途上などに於て不意に出會場合あれば速かに立退べし自己より出る呼吸にて上等の種族人を穢さしめざるために早速其手を以て自己の口を掩ふべし然して上等中或ひは寺院内に立入る事は決して許さず若その迷惑に遭遇するときは其寺院たると家屋たるの別なく清淨の儀式を行ふべし云々

斯の如く擯斥せらるゝと雖もこれを他より想像するごとく困窮はあらざるなり幵は此波里夜人は種族の隔ての密なるために他の如き偏りたる規則に關せず自儘に生活の道を計



り酒を飲み肉を食しかの上等人のごとき細密にして笑ぬべき規定および種々なる宗教頑固なる習慣に束縛せらるゝ事なく自由勝手にその子を繰付せしめ或ひは兵となり或ひは職工となり何職業の嫌ひなく孜々として出精勉強するが故に自然に身は豐饒にして生計に苦しむことなし之に反して婆羅賀磨師および上等種族人は時々處々に於て饑餓を叫ぶ貧民を生ずることあり

尚且この波里衣 Pariya 人にのみ牛肉を喰ふの特許あるも元來天竺にては此獸を神と等しく尊敬するの風俗あれば生たるを殺すを許さず唯自然に死せし牛のみを切て食するの許しありやゑに時々町村外か或ひは畑中等に二三十人の波里衣人が手に〳〵庖丁を持て將に死なんとする牛を目戍りその

牛の死するを見るや直ちに四方より飛蒐り各々爭そふてその肉を屠りて我逸に己が小屋へ持歸ることなりその他にも種々の面白きこと多しといへり

尙波里衣人の外に輕蔑せらるゝ者最も多しこれを無種族人と稱へて犯罪によりて其種族中より放棄せられしうへにてその權利をも併せて剝奪されたる者其なり今阿跋邪 Rajahs 書を閲するに種族中にて分離したるは何れの派と雖も各自相異なる組織にして別に設けたる取締によりて其律法を守ることなり故ゑに其種族人にして他種族人と結婚するを禁じ其身は社會の奴隷の如く種々の定めに壓せられ或は甲の職工の家に産れし者は乙の職業に轉ずることを許さず若その講の規定を犯すときは其罰これが家族におよび妻は良人に離れ



子は親を棄てその財産田土は悉皆その取締人のために奪ひ領せらるゝことなり而して後悔悟して再び元の種族に歸るときは最も嚴重なる取締を受るのみならず莫大なる償金を出して其取締人および婆羅賀磨師を慰むるに非ざれば決して元の種族に歸ることを許容せず然れどもまた種族の規則を能遵守するときは婆羅賀磨師は之を扶助して若遠方などへ旅行するも同種族人に饗應せられ丁寧なる取扱ひをうくるのみならず其不在中は數年間の久しきに亘ると雖歸鄕するまではそのパポタ Bapota (先祖傳來の田地)および家屋は其種族の世話によりて舊の如に現存するなりと記したりき

ルスレ Rousselet 氏の論に曰く印度人は大いなる壓制の害を蒙ることありと雖もまたこれと共に德を得ることあり斯中種族人

は温柔にして艱難なく唯一の亂暴を有しその亂暴を以て種族の律法を定めたり而して人民は皆々蒙昧にて活潑なる自由なく從つてまた愛國の氣力に乏しく故に永久貧弱なる婆羅賀磨師のために壓制せられたり然して印度國は婆羅賀磨師が其下等人を壓して屢々職爭をもなし充分の我慢により て之を維持したるも一度婆羅賀磨師の勢力衰へたれば他の諸種族人は外寇を退ぞくるの氣力なきのみならず唯忙然として自らこれに謁せざるものゝ如し而して其上に立て特權を有し政治を扼れる者は諸外國の横領者仮令ば英國佛國の嫉ひなく之に從順して更に忌む處なきは印度下等人の通常にして實に愛國心を失ひたる者といふの他なかるべし

種族黨の規則を破りて種族權を剝奪さるゝの規定あり然れ



ども其中最も頑固にして之を破滅させ難きものは天竺の習慣にて恰かも神の如くに尊敬せる牛肉を喰ふことを禁ずるとなり之は諸人も既に熟知することく此戒は獨り天竺のみに止まらず延て支那日本にも傳來して明治の初年に到る迄は日本人にても牛を啖ふことを厭ひしなり偖天竺に於てはいかほど面倒なる差支へあるも此規則は嚴重に守りて動かず今を距こと百年前天竺に大饑饉ありきその時に當りて同國の軍人等は我荷物を運搬すまた牛肉を食することを厭とせずして却て牛に代りて饑死することを甘んせしことあり又曾て三十年に英國政治に就て大に內亂を生じたることありその內亂の起原は英政府より其軍人(天竺人)に牛の脂にて濕はせし彈藥(其時の鉄砲の彈藥は口にて開くべき物なりし)附與せしよ

りシボイ Cypayes 人等は實に笑ふべきの說をなして曰くこれ我等に牛の肉を食せしめて同有の種族權を失はしむるの奸計なりとて遂にこれよりして內亂を惹起したりとまたペリン Perrin 氏の日記に書記たる事を讀に予印度を旅行中或日僕たる印度人に牛肉を食せしめんと爲たるに此僕は一目牛肉を見るなり忽偖神經に感したるか恰かも狂人の如になり兩手を合掌し大聲を發しこの尊き獸を啖ふとは實に恐ろしき大罪なりとて大いに歎き悲しみたるにぞ氏は彼をして病を發さしめんことを憂い早々にその肉を退そけたりとか

ルシヤ Russia の皇子たるソルチ・マフ Soltikholl 公の記事を讀むに尙これより一層笑ふべきことあり或大學識ある婆羅賀磨師は自開化したる心にて度々金滿なる英人に交際を求めしが



英人も最も丁嚀にこれに接し相互ひに事情を語りあひ實に親密の間となりたるやゑ時々婆羅賀磨敎の習慣を論議するに至りたり然るにその婆羅賀磨師も天晴開化の心得にてその學術論を可としたりける或日の事なん計ぞもかの英人が食事をなすの時に當り婆羅賀磨師の訪ひ來りしやゑ英人は自らこれを出迎へ幸ひの折なれは唯空漠たるの論議のみに止まらず之を實地に就て行ふこそ宜けれと思ひ定め婆羅賀磨師に對ひ偏屈なる習慣を取除くべき事を勸諭予と共に外面の癖を除き眞實に開化せられよとて其手を携さへ引て食堂に到り俱に席に着きまづこの香物を食し給へと云たるに彼婆羅賀磨師は食卓の上に牛肉のあるを見るや否や直ちにかの慣習は神經を刺擊せしと見ゑて一言の詞も出さずウン

と計りに後に倒れ稍一時は氣絶せしが漸くにして我に復り早々に逃歸りし後は絶て歐州人と交際を結ばざりしとぞ

斯の如く規則と習慣とに泥みたる種族人のとなれば酒と云ば一垂一滴もこれを飲となしと雖も交際上開化せし者に至りては宛も土耳古人の爲す如く人に對して穩かなるのみならず西洋酒をもよく飲なり

斯の如く面倒なる規則は一々數擧るに遑あらざるが殊に人畜の區別なくすべて物の死骸または皮の類には手を觸ると雖も許さず故に皮にて製造し物は馬の鞍手綱および書籍の表裝靴等に至るまで皮のある物を拂ふには手を絹にて包にあらざれば一切これを扱ふとなし

第一に嚴重なる規則といふは我種族より下等なる種族人と



倶には會食する事を許さず且波里衣 Paris 人およびマホメッド Mahomet 人ならびに歐州人の手にて調理せし食物は一切食することを禁じたり然と雖も壯年の婆羅賀磨師が親戚に離れて歐州に留學する爲め出立なさんとするに際してボンベー Bombay 府の地にある流行の料理店に至りて酒宴をなすは咄も嫌ふとなし奇怪といふべしされども波里衣 Paris 人の家居に入り又波里衣人を我家に入しむる等のとは縱令その生命を失なふとも之を許さゞるなり

且同種族人の外へ互ひに縁組するとを禁じその上婦人は一且他に嫁たる上は縱令その良人が死するとも雖も再び他人に嫁するを嚴禁せり這は婦人たる者は飽迄もその良人を大切

にすべき物なりといふ事を示すために男子より設けたる規則なり

尚また死人に觸ると雖も大いに忌處にして若知らずして不斗これに觸ることあるときは速かに貴き水にて其身体を清めしむるなり之を清めざる限りは其家に歸ることを許さず而してその之を清むる一手術といふは或獣類犬猫の如き物に多く觸るを以て清めるなりとすその他に尚一術ありこれは金屬にて造りし物の穢れを清むるには水にて洗ふを以て充分なりとす然りと雖も瀬戸物の類の穢れは之を破棄すべしといへりグヲンザユ Granthi 氏の記行を見るに到る處の途中に於て往々瀬戸物類の鍋等が數多棄あるを見たりこれ種族人は如何なる貧窮の者と雖もその瀬戸物の穢れるときは再



びこれに食物を調へざる故なりと而してその穢れるといふよは若此器物にして一度波里衣人の目に觸ると以てこれを穢れたりとするよとにて如何なる貧窮人といふとも其品を打棄て別に新らしき器物を購求ることとなりと斯く笑ふべく恠しむべき習に對しまた種々奇異なる反對の規則あり譬て云ば絹布の如き或は金屬の如き物はかの卑賤波里衣人のために穢さると雖もこれを洗ひ去ればその穢れは除きたりとして棄るに及はずといへり是によりて考ふるに價の貴き物は洗ひて濟むも價ひの卑き物は破棄せざればその穢れの全く除却せずといふは安き品れ誰人も容易に購求得べく高き物は購求に容易ならぬを斯なすことにて實に笑ふべき我慢の外飾なるのみこれ畢竟種族人が下等人と共に交際